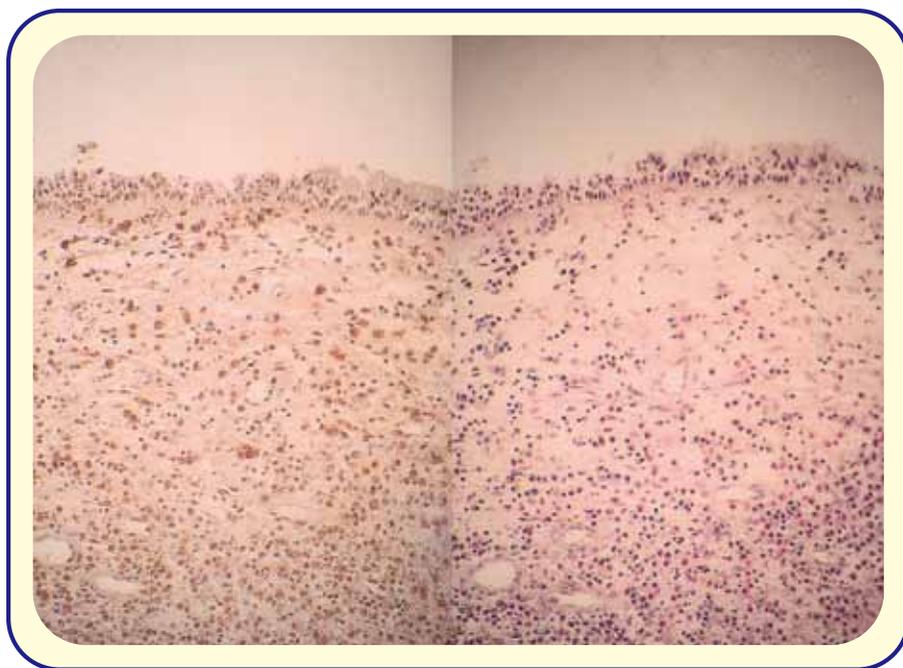


第17号

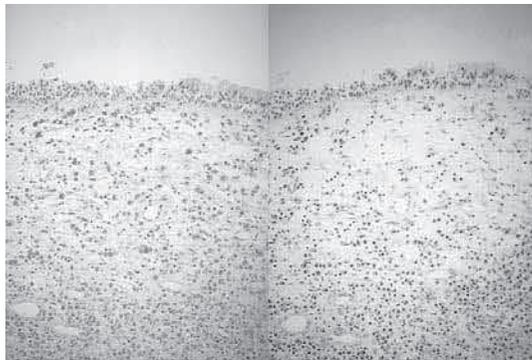
さくらじま

2003



鹿児島大学大学院
聴覚頭頸部疾患学講座
(旧耳鼻咽喉科学教室)
同門会誌

〔表紙写真の説明〕



アスピリン喘息例における鼻茸粘膜。
左：抗ヒト VEGF モノクローナル抗体，右：HE 染色，連続切片を用いた免疫組織学的検討。線維芽細胞，単球——マクロファージ系，好酸球などに染色性を認めた。

松根彰志

目 次

卷 頭 言	1
I. 同 門 会	3
II. 教室来訪者	5
III. 教室行事	6
1. 共催の講演会	6
2. 第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会主催	9
3. 桜島フォーラム	14
4. 鼻の日 市民講座	15
IV. 同門会報告	17
V. 地域医療報告	20
1. 巡回診療	20
2. 身体障害者巡回相談	20
3. 学校保健（統計報告）	20
VI. 特殊外来通信	24
1. アレルギー外来	24
2. 中耳炎外来	25
3. 副鼻腔炎外来	25
4. 頭頸部腫瘍外来	27
5. 補聴器・難聴耳鳴外来	29
VII. 病理集計	31
VIII. 各省庁諸研究	32
IX. 業 績	33
1. 原 著	33
2. 総 説	34
3. その他	34
4. 国内学会発表	35
5. 国際学会発表	43
6. 学位論文要旨	45
X. 医局通信	46
1. 新入医局員紹介	46
2. 医局人事	47
3. 学会報告	48

①	第12回日本頭頸部外科学会	48
②	第14回気道病態シンポジウム	48
③	第15回気道病態シンポジウム	49
④	第20回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	49
⑤	第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	50
⑥	第14回日本喉頭科学会総会	51
⑦	第14回日本アレルギー学会春季臨床大会	51
⑧	第103回日本耳鼻咽喉科学会総会	52
⑨	第26回日本頭頸部腫瘍学会	53
⑩	第64回日本耳鼻咽喉科臨床学会	53
⑪	第15回日本口腔咽頭科学会総会	54
⑫	第41回日本鼻科学会総会	55
⑬	第12回日本耳科学会総会	55
⑭	第54回日本気管食道科学会総会	56
⑮	第52回アレルギー学会総会	57
⑯	2002 ISIAN (ドイツ・ウルム) に参加して	58
⑰	The 6 th International Academic Conference on Immuno-& Molecular Biology in Otorhinolaryngology (IAC)	61
⑱	Asian Research Symposium in Rhinology	62
4.	関連病院便り	63
①	国立病院九州循環器病センター	63
②	県立大島病院	64
③	県立北薩病院	65
④	県民健康プラザ鹿屋医療センター	65
⑤	藤元早鈴病院	68
⑥	出水市立病院	69
⑦	済生会川内病院	70
⑧	かごしま生協病院	71
⑨	天辰病院	72
⑩	今村病院分院	73
XI.	関連病院住所と診療日案内	75
XII.	同門会及び教室員名簿	79
	編集後記	95

巻 頭 言

黒 野 祐 一

イラク戦争に続く北朝鮮の核開発問題、さらには新型肺炎の世界的流行と、マスメディアを通じて流される情報は、ただでさえ不景気に悩む毎日に不安を募らせます。その一方で、イチローと松井の健闘ぶりを報じる米国からのニュースに元気付けられます。せわしい落ち着きのない時代になったものだと思いつつも、ふと気付くと、インターネットを通じていろんな情報を求めている自分をそこに見出し、滑稽に思えることがあります。

情報の氾濫と騒がれたのはすでに過去のこととなり、いまやこの溢れんばかりの情報が、ADSLや光ファイバーと呼ばれる回線による高速インターネットを通じて、これまで予想もできなかったスピードでもたらされる時代に突入しました。しかし、世の中は面白いもので、スピードを追い求める多くの現代人の生き方とは全く正反対のスローライフという人生の過ごし方が最近注目されるようになってきています。さらに最近はスローフードなるものも流行っているようで、何のことかと思っていたら、ファーストフードに対する食品のことだと教えられました。要するに自然にそして人に優しいエコロジカルな生き方なのだと理解すると同時に、ふとしばらく遠ざかっていたサイクリングが思い出され、これこそまさにエコロジカルなスポーツであり、スローライフにも通じるころがあると、ある日、倉庫の片隅に眠っていた自転車（ロードレーサー）を引っ張り出して桜島一周の旅を試みることにしました。

懐かしい自転車を愛車に積み込み、桜島フェリーで桜島に渡ってこれを組み立て、いざ出発というところでまず気になったのが桜島の噴煙と風向きです。とにかく火山灰を避けることが最優先だと友人に聞いたからですが、その日は幸いに噴煙は見られませんでした。しかし、海沿いを周回するだけだからそれほど起伏はないだろうと高を括っていたら、予期に反して急な坂道が続き、次の曲がり角を過ぎるとどんな坂がまっているのかと不安の連続でした。また、少し休もうかと思っていると、沿道のどこからか「頑張れ」と声がかかり、降車するわけにもいかず、汗まみれになりながら必死の思いでペダルを漕ぎ続けました。車だったらこんなことは全く気にせず、そして不安もなく走れたのにと、スローライフが必ずしもものんびりした楽な暮らしを意味するものではな

いことを実感した次第です。しかし、いつも噴煙を気にして走行していたおかげで桜島の刻々と変わる様をいろんな角度から眺めることができたし、車を運転しては気付かない周囲の景色を堪能し、これまで感じることのなかった桜島の風と香りに心が癒されました。

桜島を周回したあと、港近くのマグマ温泉にゆったりとつかるのも格別の楽しみがあります。IT文明の発達によってますますスピードが必要とされ、ややもすればこれに押し流され、そのために狭視野的な生活が強要されるこの頃、少し足並みを緩やかにして束の間でも自分そして自分の周囲をゆっくり見渡すことが必要かもしれないと思っています。といつつも、サイクルメーターに表示される走行記録をいつも気にしながら走っているのは、どうしようもない悲しい性でしょうか。

医学を学んだ60年を振り返る

理事 吉田重弘

第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会は、平成15年2月13日～15日、黒野祐一会長の下、鹿児島市で開催され、盛会裏に終了しました。その間、出席された多くの方々に、高い賛辞を受けられました。わずか就任5年目にして、素晴らしい企画で、アレルギー将来への展望と夢を発表して貰った業績に対して、心から敬意と感謝を申しあげます。

さて、私の長い長い60年間も、過ぎてみれば短く感じられます。限られた紙面では、多くを記する事は不可能ですので、初期の暗中模索時代の中から、思い出すままに、数点をのべてみたいと思います。

医専一期生の入学式で、学生は戦闘帽を着用するように、との指示がありました。その時父兄及び学生の大部分から異議があり、角帽にしてほしいとの強い要望が出され、かなりの時間もめにもめたのでありました。遂に当局も折れ、卒業までには、角帽に変更するとの約束を得ました。ミリタリズム最高潮時代にあって、リベラリズムに関心を持った学生の記念すべき反抗だったと思っています。

終戦間近、初夏の頃だった様です。警戒警報が発令され誰も居ない県立附属病院の薬局にて、S君と見学をしていました。すると突然、ダダダダーン、バリバリ、ガチャガチャガチャーンと窓ガラス、薬ビンその他の鋭い割れる音がしました。とっさに、2人は床に身を伏せて命拾いをしました。後で米軍グラマン戦闘機の機銃掃射とわかりました。

同じ時期に、谷山の軍需工場が、B29爆撃機の爆破により壊滅状態となりました。そこで働いていた17才前後の女子挺身隊には、重傷者が続出し、真に悲惨で、この世の地獄を見る光景でした。私達医学生は動員され、治療の助手を命ぜられました。薬品その他衛生材料が不足し、泥に汚染された傷口の治りは悪く、蛆虫の発生する例もありました。なお約1週間位して、破傷風が多発し、混乱の極みとなりました。この経験は、後年私の治療に役立ち、破傷風2名の内1名を救う事が出来ました。

国立大村病院インターン，カリキュラムの中に小児科実習があり，毎日殆んど腰椎穿刺を勉強しました。貴重な記憶となっています。

10月頃，2階建てのインターン宿舎が全焼しました。昼頃，1階に住む用務員の奥さんのテンプラ油の不始末でありました。貧乏なインターン生全員が，大切な本その他を焼失し，国家試験を数ヶ月後に控えて途方に暮れたのでした。

鹿大医局に入って，直後の事でした。或日の午後，野坂教授から「チョット出て来るから留守を頼む」と云われ，待っていたのですが，日が暮れても戻られなかったので心配しました。後で聞くと，開業医の所で，18才の娘さんの上咽頭線維腫の手術が行われ，後出血がひどく，外科医を呼んで輸血その他の止血処置が行われたとの事。翌朝先生曰く「昨夜は医者になるではなかった」と。経験豊富な教授でも，うまくいかない事があるのだと知りショックでした。

医局を辞して，国立都城病院に勤務しました。大学では見かけない患者さんの診察もありましたが，食道異物の多いのには驚きました。それはそれとして，休日になると，外科の金行院長の弾かれるピアノの音色が，私の心をなごませてくれました。

以上勝手気ままに，約12年間の思い出についてのべましたが，後の48年間は，前述期間の応用編と考えました。ただ，医療倫理について云えば，ヒポクラス時代から続いて来たパターナリズムの考え方が，平成時代になり，ますます修正が加えられ，21世紀に適応する倫理として検討されるであろうと思うのであります。

最近，心に残る医療体験記が，日本医師会から届けられました。筆者は29才の女性で，64才の父を癌で亡くした人。「治すためだけの治療ではなく，死期に付き合ってくれる優しい医療があれば，私は，もっとうまく，父を不安と矛盾から守ってやれたかも知れない」と医療技術の進歩は勿論大切であります，尊厳死を真剣に考える時代が，既に来ているのです。

Ⅱ. 教室来訪者 (平成14年1月～12月)



9 月	宮崎医科大学耳鼻咽喉科教授	小 宗 静 男
9 月	熊本大学医学部耳鼻咽喉科教授	湯 本 英 二
9 月	島根医科大学耳鼻咽喉科教授	川 内 秀 之

1. 共催の講演会

1. 第113回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会 (2月14日)

(第10回鹿児島アレルギー懇話会)

2. 第29回日耳鼻南九州合同地方部会学術講演会 (4月13日)

(第114回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会)

サテライトシンポジウム：

「薬剤耐性菌による上気道感染症に対する治療戦略」

山中 昇 先生 (和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科教授)

一般演題：「人工内耳手術を行った好酸球中耳炎の1症例」

笠野 藤彦, 須田 佳人, 花牟礼 豊, 鹿島 直子 (鹿児島市立病院)

東野 哲也 (宮崎医科大学)

「急性低音障害型感音難聴 –最近の動向–」

朝隈 真一郎 (鹿児島市)

「高齢者の扁桃周囲膿瘍について」

早水 佳子, 宮之原 郁代, 黒野 祐一 (鹿児島大学)

「睡眠時無呼吸の検査入院中に小脳出血をきたした1症例」

田中 紀充, 出口 浩二, 松根 彰志, 黒野 祐一 (鹿児島大学)

「当科における随外性形質細胞腫症例について」

福岩 達哉, 福山 聡, 西元 謙吾, 黒野 祐一 (鹿児島大学)

「頸部リンパ節転移をきたした髄膜腫の1症例」

大堀 純一郎, 高木 実, 牛飼 雅人, 黒野 祐一 (鹿児島大学)

3. 第115回日耳鼻鹿児島県地方部会学術集会 (5月9日)

特別講演：「九大病院における下咽頭癌の治療について」

小宮山 荘太郎 先生

(九州大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科学教授)

一般演題：「当科における喉頭部分切除術例の検討」

田中 紀充 先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

「当科における頭頸部腫瘍症例に対する TS-1 の使用経験」

森園 健介 先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

4. 第27回日耳鼻鹿児島県地方部会総会

第116回学術講演会（6月9日）

特別講演：「めまいの診断と治療－最近の進歩－」

山下 裕司 先生（山口大学医学部耳鼻咽喉科学教授）

一般演題：「内視鏡下鼓膜穿孔閉鎖術の試みについて」

出口 浩二，宮之原 郁代，牛飼 雅人，黒野 祐一

「術後性頬部膿胞症に対する Trocar を用いた手術について」

積山 幸祐，林 多聞，早水 佳子，出口 浩二，牛飼 雅人，
松根 彰志，黒野 祐一

「中耳 adenoma の 1 症例」

福山 聡，福岩 達哉，出口 浩二，黒野 祐一

「当科における中咽頭癌例における頸部リンパ節転移について」

谷本 洋一郎，福岩 達哉，西元 謙吾，黒野 祐一

5. 第1回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会（7月25日）

特別講演：「慢性副鼻腔炎の病態に関する一考察」

夜陣 紘治 先生（広島大学大学院耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学教授）

一般演題：「当科における好酸球性副鼻腔炎について」

吉福 孝介 先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

「生協病院における小児アレルギー性鼻炎の動向について」

江川 雅彦 先生（鹿児島生協病院耳鼻咽喉科）

6. 第3回耳鼻咽喉科 鼻の日 市民講座（8月3日）

「鼻の病気と嗅覚障害－鼻炎，カゼ，蓄膿との関係－」

出口 浩二 先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

7. 第2回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 (9月12日)

特別講演：「真珠腫手術の戦略と手技」

高橋 姿 先生

(新潟大学大学院医歯学総合研究科耳鼻咽喉科学分野教授)

一般演題：「深頸部感染症の診断と治療」

須田 佳人 先生 (鹿児島市立病院耳鼻咽喉科)

「最近の当科における上気道感染症の起炎菌とその耐性化について」

平瀬 博之 先生 (県民健康プラザ鹿屋医療センター耳鼻咽喉科)

8. 上気道アレルギー疾患を考える会

(第3回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会) (11月14日)

特別講演：「抗アレルギー薬の作用機序と臨床薬理」

上川 雄一郎 先生 (独協医科大学薬理学教授)

一般演題：「塩酸エピナスチン (アレジオン錠) の鼻茸粘膜への好酸球浸潤抑制効果について」

大堀 純一郎 先生 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

「塩酸エピナスチン (アレジオン錠) による初期療法について」

原口 兼明 先生 (原口耳鼻咽喉科 院長)

「喉頭アレルギーを疑った症例」

昇 卓夫 先生 (今給黎総合病院 耳鼻咽喉科部長)

9. 第4回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 (11月28日)

(第8回南九州上気道感染症臨床懇話会)

特別講演：「副鼻腔気管支症候群とDPB -マクロライド療法をめぐる-」

工藤 翔二 先生 (日本医科大学内科学第4教室教授)

一般演題：「前頭洞嚢胞に対する内視鏡手術について」

早水 佳子 先生 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

「当科における喘息を合併する難治性副鼻腔炎の診断と治療について」

吉福 孝介 先生 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

2. 第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会主催

黒野祐一教授就任以来、初の全国学会主催となりました。以下に、日本耳鼻咽喉科学会誌に報告として掲載いたしました文章を以下に掲載させていただきます。同門会、地方部会の先生方には大変お世話になり、無事に本会を主催できましたことを厚くお礼申し上げます。また、関連病院の理事長、院長先生には、多々ご高配を賜り誠に有難うございました。

(文責 年次幹事 松根彰志)

日耳鼻誌掲載報告

会長 黒野 祐一

平成15年2月13日から15日までの3日間、鹿児島市の城山観光ホテルで開催いたしました。お天気もまずまずで、特に最初の2日間は快晴で暖かい日にめぐまれました。

(1) 1会場での開催、一般口演、ポスター演題、ミニシンポジウム

本学会は、第1回大会以来、原則1会場で開催という伝統がありましたが、その後質量ともに発展していく中で、最近では2会場以上で開催することもありました。しかし、今回は原点に立ち返って、ベテランから若手まで全員が一同に会して様々な演題を聞いて質疑に参加する1会場での開催にこだわりました。そこで、本学会「プログラム委員会」にもお諮りしつつ、一般演題名93題のうち、「アレルギーの疫学」や「扁桃・病巣感染症」を中心に34題をポスター演題として選定し、さらに16題を「上気道における自然免疫、マクロファージ」、「好酸球性炎症の病態」、「腫瘍免疫」、「免疫療法の基礎と応用」の4つのテーマからなるミニシンポジウムの演題とし、全演題を整理編成させていただきました。ポスター演題は、発表の時間配分を「討論中心」で特徴を持たせ、率直で熱のこもった質疑応答を展開していただきました。また、ミニシンポジウムでは、次の段でご報告します学会のメインテーマを意識した、しかも時流にかなったテーマを掲げましたところ、メインテーマを内容的にしっかりと支えていただけのものとなりました。全体を通じて、演題の数としては、アレルギー性鼻炎、花粉症の疫学、病態、薬物治療関連が最も多かったようですが、今話題の好酸球性(難治性)炎症に関する演題もまとまって出されていました。病態論との関係では、これまでのTh1/Th2バランス関連以外に、アラキドン酸カスケード特にプロスタグランディンの免疫応答への影響に関する演題が目を引きました。内耳免疫や腫瘍免疫に関する演題もこれまでとほぼ同

程度にしかし、地道な力作といえる研究結果が報告されました。

発表形式としては、一般口演やミニシンポジウムでは、従来のスライドと新しいコンピュータ（PC）によるプレゼンテーションが約半数ずつでした。基本的には本学会の規模も考慮して、教室関係者による手作りの学会運営で対応しましたが、PC関連には業者のサポート体制を最初からそして当日も準備、配置いたしました。事故やトラブルを事前に防止することにより、今後PCの演題は更に定着し増えていく方向にあると思います。

（２）テーマ：「アレルギー・免疫・炎症—上気道疾患におけるダイナミクス」

今回の学会のテーマは、耳鼻咽喉科における主要フィールドの1つである上気道において、抗原認識に始まりI型アレルギーを含む免疫学的なプロセスののちに形成される炎症病態を「一連の動的な流れ」のなかで観察し、相互の関連性を探ることを主な目的とする意味を込めて設定いたしました。（１）教育講演（大阪大、審良静男教授，司会：福井医大，藤枝重治教授，京都大，稲葉カヨ教授，司会：和歌山県立医大，山中昇教授）では、自然免疫、抗原認識といった「一連の動的な流れ」の発動に重要なポイントとなる Toll-like receptor（TLR）や樹状細胞（DC）に関する最近の知見を紹介いただきました。自然免疫が獲得免疫と対置され、比較的下等な動物の生態防御を担うという概念がくずれつつあり、DCに対する働きかけを介して獲得免疫の活性化につながるといったことや、さらにはミエロイド系およびリンパ球系DCのサブセットとその機能に関する大変刺激的な最先端のお話を聞くことができました。（２）特別講演（鹿児島大，丸山征郎教授，司会：鹿児島大，大山勝名誉教授）では、感染性炎症の制御とその破綻と関連して、臨床的には敗血症や多臓器不全と関連した、内因性マリファナ等新しいメディエータの話題を提供いただき、教育講演でのお話の次の重要なステップとして「一連の動的な流れ」にピッタリ沿うものでした。そして、（３）粘膜免疫の臨床応用に関する基礎的、理論的裏付けと、現在どこまで進んでいるか等について、ランチョンセミナー（アラバマ大，McGhee教授，司会：大分医大，茂木五郎教授）とシンポジウム（広島大，高橋一郎教授他，司会：千葉大，岡本美孝教授，島根医大，川内秀之教授）という形で押えることができました。「一連の動的な流れ」を予防に生かすという当教室の研究面で中心的に掲げているテーマでもあり、今回粘膜免疫機構の基本的な知見と上気道における炎症・アレルギーの誘導相に関する新しい知見を確認できたことは大変意義深かったと思います。

(3) サテライトシンポジウム、と公開講座

サテライトシンポジウムでは、「小児のアレルギー性鼻炎の診断と治療」(司会：大阪医大、竹中 洋教授)というテーマで、耳鼻科(日本医大、大久保公裕助教授、人吉市、友永和宏先生)、小児科(千葉大、河野陽一教授)の両方の立場から、日常臨床での現場感覚を生かして大いに語っていただきました。「鼻アレルギーガイドライン」の弱点の1つとも思われるこの問題の解決の糸口が本シンポジウムに含まれていたと自負いたしております。また、本サテライトシンポジウムに先立ちまして行われました、「グラクソ・スミソクライン国際交流基金」の贈呈式では、独協医科大の盛川 宏先生が受賞されました。

ところで、例年この時期に、診療科/教室横断的に開催されている「鹿児島アレルギー懇話会」を兼ねる形で「公開講座」を開催いたしました。耳鼻科(藤田保衛大、内藤健晴教授、司会：札幌医大、氷見徹夫教授)、皮膚科(鹿児島大、金蔵卓郎助教授、司会：鹿児島大、神崎 保教授)、小児科(国立八戸、赤坂 徹院長、司会：国立指宿、熊本俊則副院長)の各分野からの演題に加えて「アレルギー関連疾患の遺伝子解析」(京大、白川太郎教授、司会：鹿児島大、竹内 亨教授)についての最先端のお話も聞くことができ、なかなか重厚な内容となりました。耳鼻咽喉科領域の話題としては、最近のトピックスの1つでもある「喉頭アレルギー」をとりあげました。明日からの診療にすぐ役立つ切り口で講演いただけたことは誠に有り難かったと思います。

本学会は、日本耳鼻咽喉科学会関連学会としては、歴史も浅く「若い」学会といえると思いますが、着実に成長している学会だろうと思います。会員総数約900名のうち、今回、3分の1以上にあたる300名以上の先生方にご参加いただき、当教室の主催で開催させていただいた事は誠に光栄なことであり、鹿児島県の今後の免疫アレルギー学の発展と、臨床現場での患者さんへの還元を進めるために大きな財産となったと感謝いたしております。

来年は、札幌で、札幌医大の氷見徹夫教授の主催で開催されます。また、皆様とお会いできますことを楽しみにいたしております。

第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

平成15年2月13日から15日



日耳鼻上村理事長あいさつ



日耳鼻免疫アレルギー学会 竹中理事長あいさつ





3. 第5回 「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」

黒野教授の就任以来始められた耳鼻咽喉科桜島フォーラムも今回で5回目を迎えることが出来ました。年末のあわただしい時期ではありましたが、今回も多数の先生方にお集まりいただきました。当日は以下のようなプログラムで行われました。

第5回 「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」プログラム

平成14年12月9日（木） 19：00～21：00

鹿児島大学医学部 鶴陵会館中ホール

I. 開会の挨拶 黒野 祐一 教授

II. 症例検討 (Moderator；黒野祐一 教授) Presenter

- | | |
|------------------------------|--------|
| 1, 意識障害を来した巨大真珠腫症例の対応は？ | 田中 紀充 |
| 2, 挿管困難も予想された巨大声帯ポリープ症例の対応は？ | 林 多聞 |
| 3, 食道直達鏡にて異物を確認できなかった下咽頭異物症例 | 原田 みずえ |
| 4, 陳旧性の眼窩壁骨折の手術適応は？ | 積山 幸祐 |

III. 話題提供 (Moderator；松根彰志 助教授)

- | | |
|-----------------------------|------|
| 1, 鼻茸線維芽細胞の低酸素刺激による VEGF 産生 | 孫 東 |
| 2, マウスにおける NALT 形成のメカニズム | 福山 聡 |

前半の症例検討の部では、主に治療法や手術適応の決定に迷った症例を中心にプレゼンテーションを行い、治療法や術式などについての活発なディスカッションが行われました。通常の学会とはまた異なった雰囲気の中で、常日頃貴重な症例を御紹介いただいている実地医家の先生方の貴重な御意見を伺うことが出来たと思います。後半の話題提供の部では、現在中国から大学院生として留学中の孫先生が現在行っている研究について御紹介するとともに、当教室の福山先生が大阪大学微生物病研究所の清野宏教授（現東京大学医科学研究所教授）のもとに国内留学した時に行った研究成果を報告させていただきました。本会も皆様方のおかげで第5回という1つの節目を迎えることが出来ました。これからも実地医家の先生方の御意見を伺う貴重な場として、益々発展させていきたいと考えています。次回も多数の先生方の御参加をお待ちしています。

（文責：牛飼）

4. 第3回 鼻の日 市民講座

平成14年8月3日（土）13時30分より、鹿児島市東千石町のKCプラザホールにて約100名の一般市民の参加（入場無料）を得て開催いたしました。今回のテーマは、「鼻の病気と嗅覚障害」としました。以下に講演の内容を記します。

1. 鼻の病気と嗅覚障害－鼻炎，カゼ，蓄膿との関係－

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学 出口 浩二 先生

2. 異常嗅覚－自分は臭い？－

鹿児島大学医学部精神神経科学 堀切 靖 先生

3. シックハウス症候群と耳鼻咽喉科

日赤和歌山医療センター耳鼻咽喉科 池田 浩己 先生

一般的な鼻副鼻腔疾患と嗅覚障害の話から、世間でも問題になっており、マスコミでもしばしば取り上げられている異常嗅覚、シックハウス症候群をトピックス的な話までを提供させていただきました。

今回は、地元の先生だけでなく、シックハウス症候群について学会報告もしてこられてる池田浩己先生を和歌山からお招きして、これまでの研究や臨床経験をもとに大変わかりやすくお話いただきました。

今後とも、回を重ねて市民の皆様には有益な情報を提供していけたらと考えております。主催は当教室ですが、今後とも同門会や地方部会の後援をいただきつつ内容の充実をはかっていきたいと思っております。

（市民講座 事務局 松根彰志）



平成15年 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会

平成15年1月18日（土）鹿児島県医師会館において、同門会役員会、総会ならびに日耳鼻鹿児島県地方部会との合同の学術講演会を開催いたしました。その後、新年会も兼ねた、同門会・地方部会合同の会員懇親会が行われました。

総会では、黒野会長によりまず開会宣言と挨拶の後、同門会事務局より（1）平成14年会務報告、（2）会計報告、（3）平成15年事業計画ならびに予算案提案が行われ、監事からの監査報告後承認されました。

今回の議事内容で特徴的な議題としては、（1）平成15年2月13、14、15日に当教室主催で開催予定の第21回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会における寄付の現状報告、財務全般の見通しに関する報告、（2）同門会役員の改選方法を明確にする、（3）県外の同門会会員への連絡、通知を円滑に行うための「Fネット 県外会員版」を整備するといったことについて、了承されました。

総会終了後、恒例の記念撮影が行われ、以下の内容で、地方部会との合同による学術講演会が開催されました。

学術講演会

一般演題

座長 花牟礼 豊 先生 （鹿児島市立病院）

1. 頭頸部腫瘍における下顎の再建と大胸筋皮弁

林 多聞 先生 （鹿児島大学）

2. 当科の頭頸部癌症例における食道癌の合併について

相良 ゆかり 先生 （鹿児島大学）

3. 漢方薬が奏功した耐性菌性反復性中耳炎の症例

内菌 明裕 先生 （せんだい耳鼻咽喉科）

座長 勝田 兼司 先生 （国立九州循環器病センター）

4. 当科における睡眠時無呼吸症候群診療のプロトコールとその問題点

出口 浩二 先生 （鹿児島大学）

5. 鼻・副鼻腔手術へのアルギン酸塩創傷被覆材の応用

福島 泰裕 先生 (耳鼻咽喉科末吉中央クリニック)

特別講演

座長 黒野 祐一 教授 (鹿児島大学)

外耳道後壁軟組織再建術とその応用

高橋 晴雄 先生 (長崎大学医学部耳鼻咽喉科学教授)

(文責：同門会事務局 松根彰志)



鹿兒島大学耳鼻咽喉科学教室同門会総会 平成15年1月18日 於：鹿兒島県医師会館

1. 巡回診療（県医務課）

- 三島村（7月3日～7月7日）
- 下甌村（11月6日～11月8日）
- 上甌村（12月4日～12月6日）
- 十島村（6月24日～6月29日）
- 十島村（10月4日～10月8日）

2. 身体障害者巡回診療

- 1月 長島町，福山町
- 2月 大浦町，上屋久町，屋久町
- 3月 佐多町，鶴田町
- 4月 有明町
- 5月 川辺町，十島村（宝島）
- 6月 三島村（硫黄島），薩摩町
- 7月 名瀬市，根占町
- 8月 出水市，与論町
- 9月 指宿市
- 10月 鹿屋市，知名町，和泊町
- 11月 入来町，上甌村，里村，栗野町
- 12月 伊仙町，徳之島町，天城町，加世田市

3. 学校保健（統計報告）

H13年4月～11月にわたり，当科において鹿児島県下の耳鼻咽喉科学学校検診を行った。

〈対象地域〉

鹿児島市，阿久根市，垂水市，西之表市，末吉町，大崎町，輝北町，財部町，志布志町，有明町，穎娃町，松山町

〈受診者数〉

小学生1359名，中学生4776名，高校生（甲南高校生のみ）359名，大学生（県立短期大学のみ）525名

〈対象疾患〉

耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，慢性扁桃炎，扁桃肥大の9疾患

〈結果〉

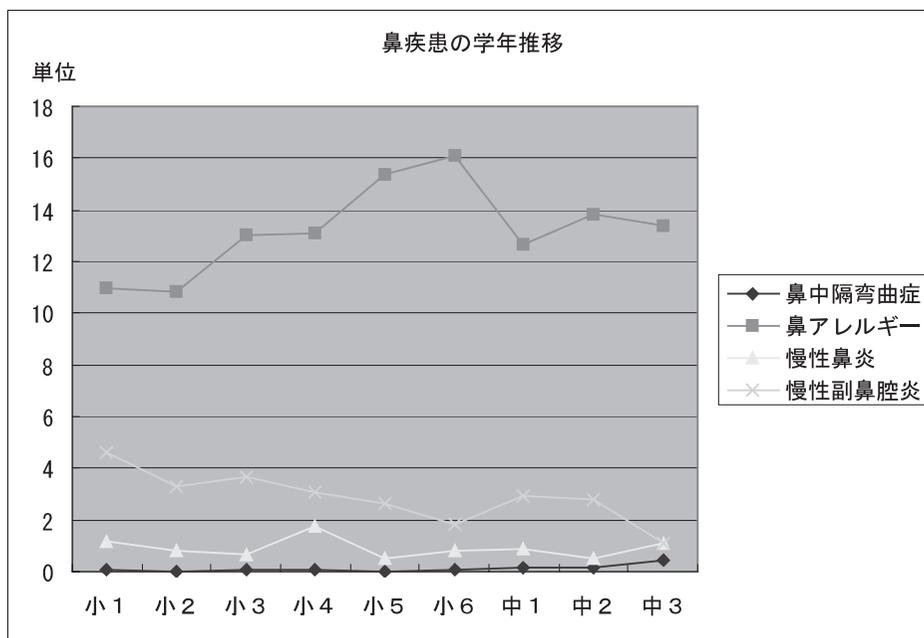
疾患別有病率では，圧倒的に鼻アレルギーが多く，次いで耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎の順に多かった。前年度も鼻アレルギーが圧倒的に多く，有病率も同程度であった。耳疾患では，どれも学年があがるにつれて低下傾向を示した。

鼻疾患では，鼻アレルギーが学年があがるにつれてやや増加傾向を示した。

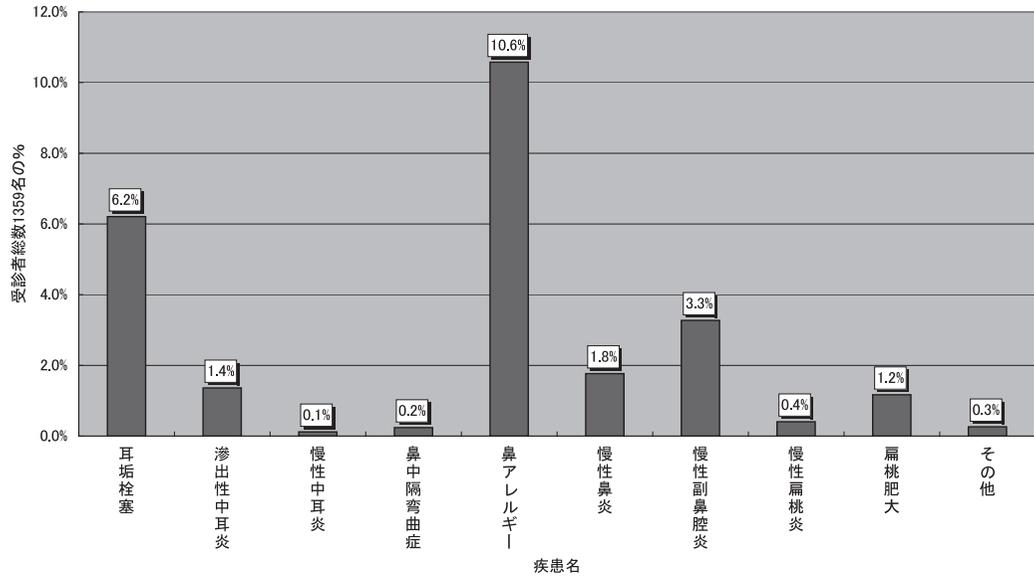
扁桃肥大は学年による変化はなかったが，慢性扁桃炎は学年があがるにつれて，低下傾向を示した。

いずれの疾患も例年と同程度の有病率であり，学年の推移との関係も例年と同様の傾向であった。

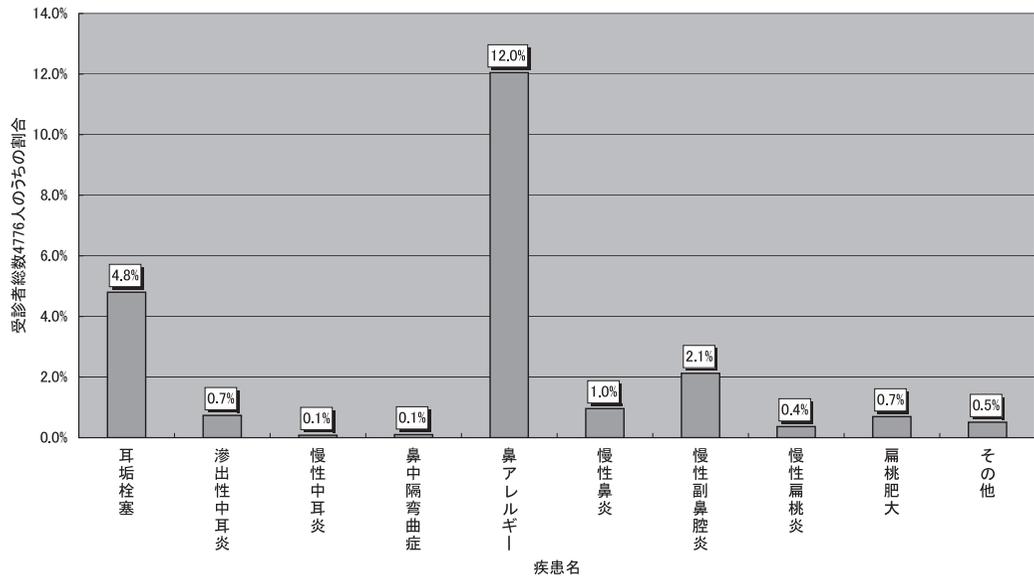
今後も各疾患の有病率の推移を観察し，学校保健・教育に役立てていく必要がある。

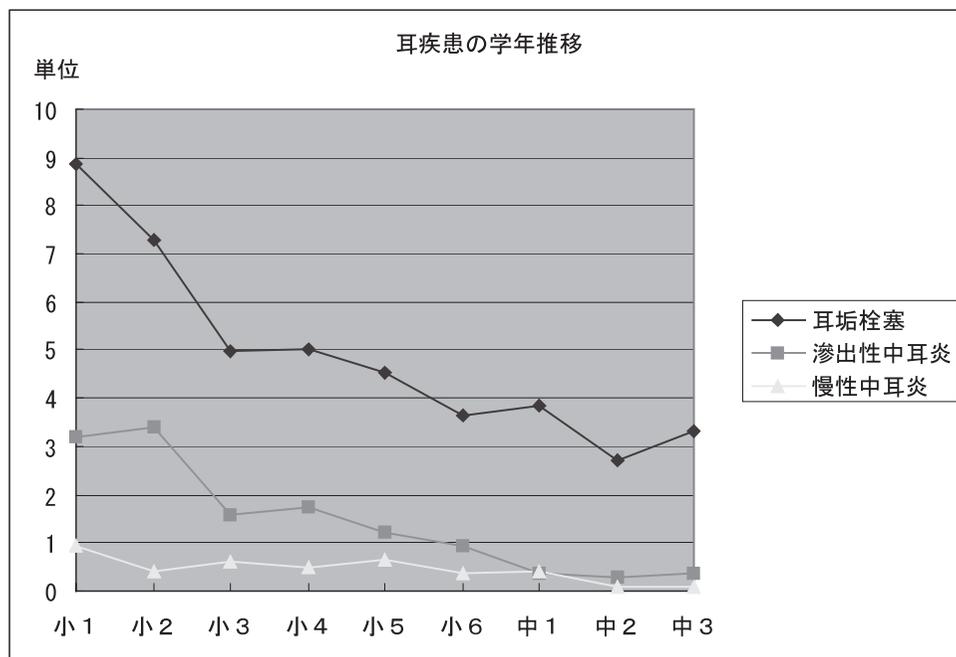
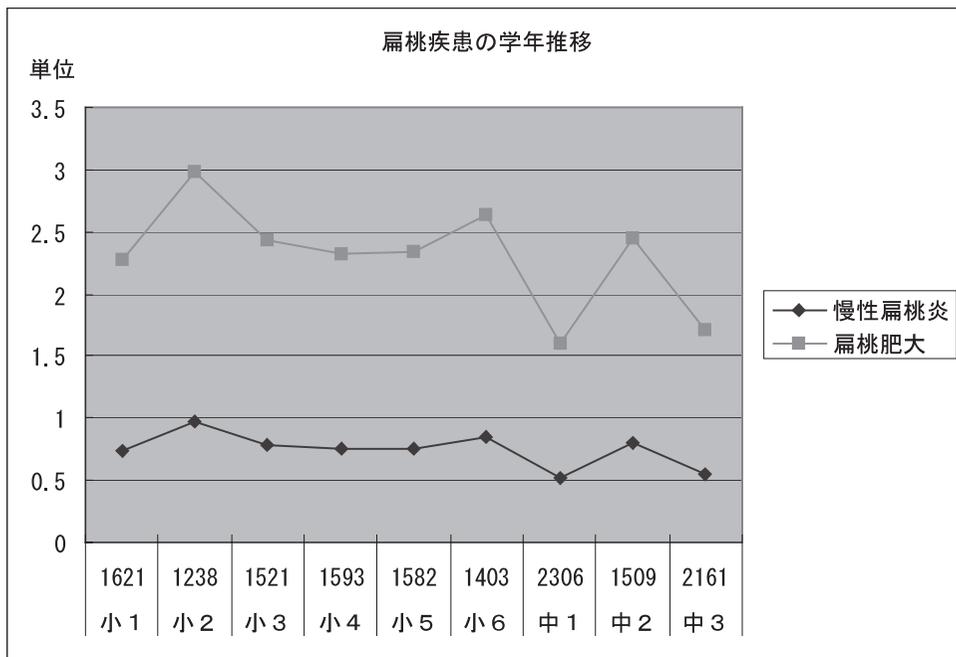


小学生における疾患別有病率 (%)



中学生における疾患別有病率 (%)





1. アレルギー外来（毎週月曜日午後2時～4時，要予約）

アレルギー外来は，1997年に設置され，ことしで6年目を迎えました。1999年4月からは，個々の患者様のアレルギー検査の結果をデータベースに登録致しております。図1が，これまでのアレルギー外来初診患者総数と，実際にアレルギー検査を行い，鼻アレルギーと診断された症例数の推移を示しています。2001年と2002年にアレルギー外来の初診数が急激に増加しているのは，慢性副鼻腔炎や鼻茸の症例に対してアレルギーの関与につき検索することがルーチンとなったためです。実際，鼻アレルギーと診断される症例は，微増傾向と言えそうです。アレルギー外来データベースを基に，今年はスギ花粉症の患者様には，初期療法のご案内を行いました。今後ますますアレルギー症例の増加が予測されますが，治療，患者教育，臨床研究をバランスよく充実させたいと思います。

（文責：宮之原郁代）

図1 アレルギー外来初診総数と鼻アレルギー患者数の推移

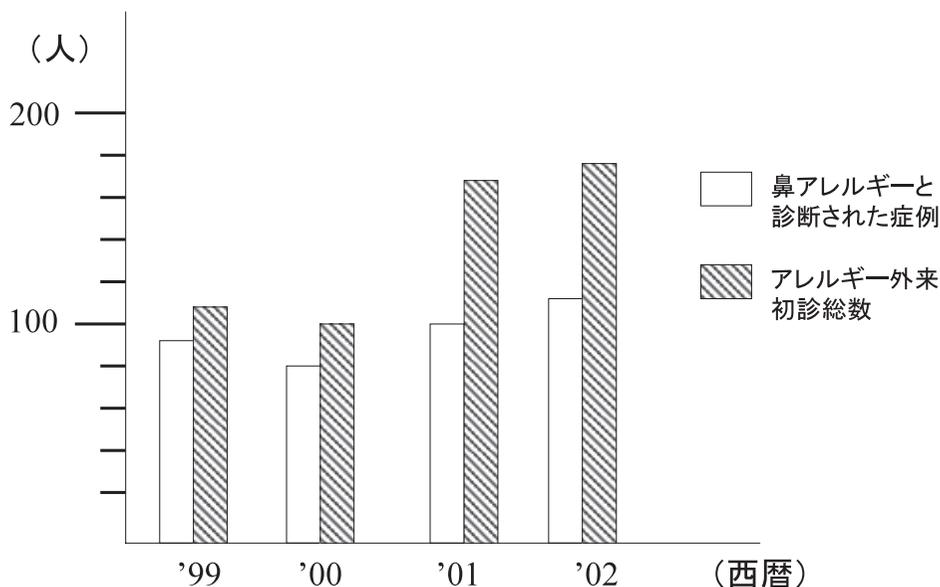


図1

2. 中耳炎外来

黒野教授の赴任以来、小児の症例を中心に滲出性中耳炎や急性中耳炎の臨床的および基礎的研究を行って来ました。小児急性中耳炎については、軽症の症例に対して初期治療時には抗生剤の投与を行わず対症療法のみを行うプロトコルを実践し、その約7割の症例では抗生剤を用いなくとも経過に問題がないことを報告しました。また小児滲出性中耳炎については、アデノイド切除と滲出性中耳炎の予後との関係を臨床的に検討するとともに、基礎的には中耳貯留液やアデノイド液の解析を行ない滲出性中耳炎の病態解明に努めています。このように急性中耳炎や滲出性中耳炎は当教室の大事なテーマのひとつであり、中耳炎外来はこれらの疾患をフォローする上で重要であります。大学病院の性格上なかなか症例が増えないのが悩みとなっています。反復性中耳炎や滲出性中耳炎の難治例等ありましたら、当科へ御紹介をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(文責：牛飼)

3. 副鼻腔炎外来

Key Word; 好酸球性副鼻腔炎, 喘息, 好酸球性中耳炎, 内視鏡下鼻内副鼻腔手術 (ESS), ステロイド内服治療

今日、感染やI型アレルギーが深く関与した副鼻腔炎の診断と治療が、副鼻腔炎の日常臨床の多くの部分を占めていますが、近年はいわゆる「好酸球性副鼻腔炎」の病態、診断、治療が関心の的となっています。この疾患の定義は、「副鼻腔粘膜に高度な好酸球浸潤を認め、鼻茸を有する副鼻腔炎」とされていますが、特に成人発症型の喘息を伴う例で極めて難治性であり、内視鏡手術後も鼻茸の再発を繰り返す点が臨床上大変問題でありました。その後、手術後にステロイドの内服治療を行うことにより経過が大幅に改善されることがわかってきました。

当科で、2000年1月～2003年3月の間にESSを行った症例で、病理所見のとれている17歳から80歳までの59例について、好酸球性副鼻腔炎関連事項（臨床症状、検査データ）について検討しました。以下にお示ししますデータは、本年の春季アレルギー臨床大会（横浜）で、教室の吉福先生が報告したものの一部です。

1) 副鼻腔粘膜への高度な好酸球浸潤

高度とはどの程度なのかは、確立された定義はないと思います。今回は、文献的に

基準を設定して、顕微鏡下にカウントして行いましたが、適切な基準であったか疑問です。「高度な好酸球浸潤」が全症例の約半分というのは、日常臨床で好酸球性副鼻腔炎を経験する率と比べて明らかに高く再検討を要すると考えています。今年の鼻科学会ではこの点に発展的修正を加えて発表を行いたいと思います。(図1)

2) 喘息合併例と非合併例

好酸球浸潤が高度で鼻茸を有する条件に加えて、「成人発症の喘息の合併」が日常臨床で困っている「好酸球性副鼻腔炎」であると実感しています。そこで、研究の方向性としては、これに一致した研究にすべきと考えています。

3) 末梢血好酸球と血液中 ECP

局所粘膜への好酸球浸潤の高度な例では、中等度以下の例と比べて、血中好酸球数高値例が喘息の合併例では、末梢血中の好酸球と好酸球の顆粒蛋白の1つであるECP (Eosinophil Cationic Protein) との間に正の相関を認めました。これは、非合併例では見られない現象で、全身的な要因が強い喘息合併例の特徴を反映したものであると考えています。(図2)

4) 喘息合併例とステロイド

喘息合併例における、経口ステロイドの手術後の使用は、明らかに鼻茸の再発を押さえ経過を改善しています。現時点では、手術後抗生物質の点滴が終了するころからプレドニン10mgの内服を2週間程度行い、その後も外来でセレスタミン1日2錠を最低2週間は継続した後、1錠に減らして様子を見ています。この程度のステロイドの使い方でも十分経過は改善されており、1日30mgや40mgからの漸減までは必要ないと思います。今後長期的な経過やステロイド後の治療の中身と期間等についても検討していく必要があると思います。基礎疾患に糖尿病があつて、経口ステロイドをいにくくといった例には幸いまだ遭遇しておりません。

5) 好酸球性副鼻腔炎，喘息，好酸球性中耳炎

喘息を有する好酸球性副鼻腔炎の例で、好酸球性中耳炎を合併する例がこの1年間で1例見られました。いつものごとく、ESSと手術後の点滴および経口ステロイドに

よる治療行いました。耳に関しましては、鼓膜穿孔部位から飛び出している耳茸のみを外来で鉗除したのみで、副鼻腔炎や喘息とともに経過を見ています。種子島の方で、こちらではたまに外来で経過を見ていますが、まずまず鼻も耳も制御できているようです。この症例に関する詳細な報告は、積山先生の執筆により「アレルギーの臨床」（宮本昭正 編集，北陸館）の2003年8月号に依頼原稿として掲載予定です。

（文責：松根彰志）

4. 頭頸部腫瘍外来

当科では頭頸部腫瘍治療後の患者さんを対象にした特殊外来「頭頸部腫瘍外来」を毎週木曜日の午前中に行っています。以前のスタイルから変わりました。診療担当医師は入院時の主治医団が継続して行う主治医制をとるようになりました。このほかにも頭頸部腫瘍外来は従来の方法から変わった点が随所に見られ、今回はそれらを中心にご紹介させていただきたいと思えます。

まず本年度の対象症例についてご紹介します。平成14年1月から平成15年3月までの当科における主な手術症例は、鼻副鼻腔癌6例、喉頭癌13例、下咽頭癌4例、中咽頭癌7例、舌癌15例、口腔底癌8例の合計53例であり、再建術式は、遊離組織移植14例（前腕皮弁5例、腹直筋皮弁7例、遊離空腸2例）、大胸筋皮弁移植9例という内訳でした。遊離組織移植が再建のスタンダードとなっていることは周知の通りですが、重複癌で既に頸部手術操作が加えられている例や、重篤な合併症のある症例などでは血管吻合の困難な例も見られ、そのような症例における大胸筋皮弁という選択肢はまだまだ重要な位置を占めるものと考えています。

(1) 初期診断

他臓器転移の有無確認は従来ガリウムシンチにて行っていましたが、現在当科では全例にFDG-PET検査を導入しております。PETによりこれまでの検査ではわからなかった他臓器転移が明らかになったのももちろんですが、頸部リンパ節転移もかなり明確に描出されることがわかり、径10mm以下のリンパ節でも転移性リンパ節と診断できるようになりました。触診、エコー、CTによる従来のリンパ節検査法に加えて大きな武器となりうるのではないかと考えております。

また、外来ユニットに DVD レコーダーが導入されたことで、局所所見の記録・保存・整理が格段に進歩しました。カンファレンスでのプレゼンテーションはもちろんのこと、学会発表などで使用する場合にも目的のファイルがすぐに検索できて、さらにそのまま静止画や動画を PC で扱えるという利点は計り知れない可能性を秘めていると思います。

(2)術前治療

殆どの症例で術前照射を行っており、放射線感受性増強作用を目的としたカルボプラチンの少量併用療法、いわゆる Concurrent Chemoradiotherapy を行っています。下咽頭悪性腫瘍については過去の症例の検討から術前化学療法が効果的であるとの結果を得ており、ネダプラチンと 5FU の 2 剤併用療法を行っています。

(3)機能温存術式の積極的な導入

近年当科では患者の QOL の向上を図る目的で、喉頭部分切除術を積極的に取り入れています。喉頭部分切除術を導入した1997年以降で当科にて治療を行った喉頭癌症例は74例ですが、この中で10例に対して部分切除術を行いました。その内訳は、初期治療での部分切除7例（水平部分切除5例、垂直部分切除2例）、再発例での部分切除3例（すべて垂直部分切除）でした。全例で術後の呼吸機能及び嚥下機能は良好であり、いずれも現在まで再発を認めておりません。部分切除術の選択においては腫瘍の進展範囲の詳細な診断が不可欠であり、そのため術前の顕微鏡下喉頭直達鏡検査がより重要な地位を占めています。また LEICA 社の手術用顕微鏡による観察、DVD レコーダーによるデータ記録、大画面液晶モニターと DVD プレーヤーによるカンファレンスなど、新しい機器の導入が診断・治療の向上に一役買っているように思われます。

その他に下咽頭癌に関しても、喉頭温存および下咽頭部分切除術の適応の有無を常に検討しつつ治療に取り組んでいます。

(4)エコーを中心とした経過観察

外来にエコーが導入されて2年近くたちますが、少しでも怪しい印象があればすぐにエコーで確認できるという環境は、頭頸部腫瘍の術後経過観察には不可欠なものであると痛感しています。エコー診断を触診や CT 読影にフィードバックさせることでこれらの技術をより効果的に高めることができますし、研修医も早くからエコー診断に慣れ

ることができるので教育面でも重要なものであると思われます。

(5)外来化学療法の導入

平成14年より腫瘍外来では術後の経過観察に加え、根治治療後の再発予防目的にTS-1を用いた内服化学療法を行っています。まだ対象症例は5例ほどと少ないですが、今後は外来化学療法をもっと積極的に取り入れ、単なる観察だけの腫瘍外来から一歩踏み込み治療も行える腫瘍外来を目指したいと考えております。

私事で大変恐縮なのですが、自分は頭頸部腫瘍をやりたくて耳鼻咽喉科に入局しました。まだまだ経験も浅く日々勉強の毎日なのですが、気がつけばこの頭頸部腫瘍外来をまとめる役目となっており、その責任につぶされそうな時も少なくありません。しかし患者さんに癌の告知をして治療に携わった以上、最後まで責任を負うのが頭頸部外科医の使命と考えています。患者さんと一緒に泣いたり笑ったりしながら、この外来の診療内容をより一層高めていきたいと考えております。

(文責：福岩達哉)

5. 補聴器・難聴耳鳴外来

補聴器外来 月・水

難聴耳鳴外来 金

(いずれも通常の月・水・金で初診ののち、補聴器外来、難聴耳鳴外来を予約致します。)

補聴器外来として主に補聴器の適合およびフィッティングを、月・水に行っています。平成14年2月に開設以来、のべ118人の受診がありました。補聴器外来受診のきっかけとしては、1)補聴器装着をすすめられた。2)補聴器を使っているがよく聞こえない。という2点が最も多い理由でした。患者さまのニーズも高く今後ますます充実させたいと考えています。

難聴耳鳴外来は平成15年4月より開設しました。当科を受診される患者様のうちおよそ3分の1が、難聴・耳鳴り・めまいを訴えて来院されます。これらの患者さまに対し内耳～中耳を含めた、聴覚・平衡覚の精査を行い、中耳炎に対する手術適応、補聴器の適応、人工内耳の適応、聴神経腫瘍の除外等の検討を行ったのち、耳鳴の患者さまを対

象に図1の流れでおこなっています。TRT療法は、1980年代後半にJastreboffによって唱えられた耳鳴の神経生理学的モデルにもとづいて、1988年Hazell（英国）、1990年Jastreboff（米国）によってはじめられた治療法で、耳鳴を消失させるのではなく耳鳴にたいして順応をおこさせることを目的としたものです。したがって、TRT療法の治療効果については長期の経過観察が必要ですが、耳鳴に対する治療法のひとつとして、患者さまの選択の幅がひろがり、お役に立てればと思っております。

（文責：宮之原郁代）

図1 難聴耳鳴外来の流れ

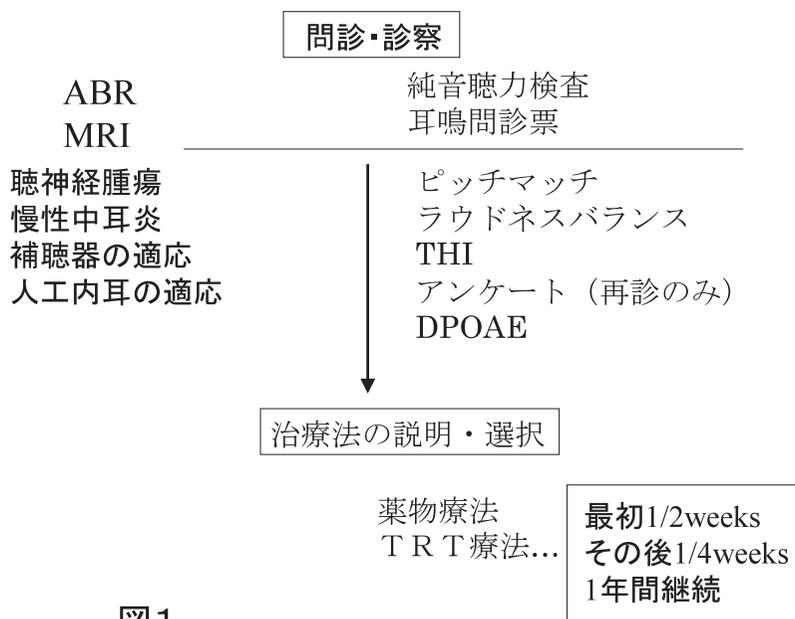


図1

	総施行件数	628		
	病棟	398		
	外来	230		
1) 腫瘍	悪性		良性	
喉頭腫瘍	SCC	26	squamous papilloma	2
	neuroendocrine cell carcinoma	1		
甲状腺腫瘍	papillary carcinoma	8	follicular adenoma	10
	follicular carcinoma	2	adenomatous goiter	1
上咽頭腫瘍	SCC	5		
	malignant lymphoma (non-Hodgkin)	1		
中咽頭腫瘍	SCC	22	squamous papilloma	1
	adenocarcinoma	1		
下咽頭腫瘍	SCC	9		
上顎洞腫瘍	SCC	3		
	undifferentiated carcinoma	1		
篩骨洞腫瘍			cavernous hemangioma	1
鼻腔腫瘍	adenoid cystic carcinoma	3	squamous papilloma	2
	malignant melanoma	1	inverted papilloma	2
	undifferentiated carcinoma	1	papilloma	2
	SCC	3	hemangioma	1
	その他	2	その他	1
耳下腺腫瘍	adenocarcinoma	1	pleomorphic adenoma	8
	mucopidermoid carcinoma	1	basal cell adenoma	2
顎下腺腫瘍	SCC	1	pleomorphic adenoma	4
舌腫瘍	SCC	14	hemangioma	1
			lipoma	1
口蓋垂腫瘍			papilloma	1
歯肉腫瘍	SCC	2		
	adenocarcinoma	1		
	その他	1		
下口唇腫瘍	SCC	2		
口腔底腫瘍	SCC	1		
口腔腫瘍	SCC	2		
	SCC in situ	1		
頬粘膜腫瘍	SCC	2		
頸部腫瘍	SCC	4	papilloma	1
	plasma cytoma	1	neurilemmoma	1
上顎腫瘍	SCC	1		
中耳腫瘍			adenoma	1
副咽頭腫瘍	SCC	2		
皮膚腫瘍			neurofibroma	1
頸部リンパ節転移	adenocarcinoma	1		
原発不明		1		
2) 嚢胞性疾患			3) 前癌病変	
喉頭	laryngeal cyst	4	dysplasia	10
	epidermal cyst	5	leukoplasmia	2
甲状腺	follicular cyst	1		
	thyroglossal cyst	1		
口蓋扁桃	tonsillar cyst	1		
4) その他	cholesteatoma	17	aspergillosis	2
	sjogren syndrome	12	actinomycosis	1
	silalolithiasis	3		

文部科学省科学研究費（平成14年12月現在）

基盤研究（B）(2)

上気道感染症予防ワクチンの開発とその粘膜免疫応答に関する基礎的研究

代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志 牛飼雅人 宮之原郁代 出口浩二

基盤研究（C）(2)

組換え抗原を用いたインフルエンザ菌に対する経鼻粘膜ワクチンの開発・研究

代表者 福岩達哉

分担者 黒野祐一

奨励研究（A）

鼻粘膜上皮細胞の分化機構ならびに細胞間情報伝達に関する生物化学的研究

代表者 出口浩二

1. 原 著

- (1) 出口浩二, 西元謙吾, 宮之原郁代, 松根彰志, 黒野祐一: 原発性小児鼻副鼻腔嚢胞例, 耳鼻臨床, 95(2): 165-170, 2002
- (2) 福岩達哉, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 松根彰志, 黒野祐一: 原発性免疫不全症を合併したペニシリン耐性肺炎球菌による小児反復性急性乳様突起炎の1例, 日本耳鼻咽喉科学会会報, 104: 1089-1092, 2002
- (3) S.Fukuyama, T.Hiroi, Y.Yokota, Paul D.Rennert, M.Yanagita, S.Terawaki, T.Shikina, M.Yamamoto, Y.Kurono, and H.Kiyono: Initiation of NALT Organogenesis Is Independent of the IL-7R, LTBR, and NIK, Signaling Pathways but Requires the Id2 Gene and CD3-CD4+CD45+Cells, Immunity, Vol.17: 31-40, 2002
- (4) 田中紀充, 福岩達哉, 宮之原郁代, 黒野祐一: 顔面神経麻痺を伴う乳幼児急性中耳炎3症例, Otol Jpn, 12(3): 166-170, 2002
- (5) Kouji Deguchi, Tatsuya Fukuiwa, Kenichi Saito, Yuichi kurono: Application of cyberknife for the treatment of juvenile nasopharyngeal angiofibroma: A case report, AURIS, NASUS, LARYNX 29: 395-400, 2002
- (6) 下麥哲也, 西元謙吾, 出口浩二, 松根彰志, 井畔能文, 坂田隆造, 黒野祐一: 長期気管カニューレ留置により気管腕頭動脈瘻を生じた1症例, 日気食会報53(6): 484-488, 2002
- (7) 出口浩二, 西元謙吾, 松根彰志, 黒野祐一: 頭蓋内へ進展した巨大な多発性前頭洞嚢胞の一例, 日本鼻科学会誌, 41(2): 137-142, 2002
- (8) Kouji Deguchi, Kengo Nishimoto, Tatsuya Fukuiwa, Shoji Matsune, Yuichi Kurono: Four infant cases with a space-occupying lesion of the nose and para nasal sinuses, International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology, 64: 247-254, 2002
- (9) 奥田 稔, 石川 哮, 馬場廣太郎, 洲崎春海, 今野昭義, 岡本美孝, 間島雄一, 萩野 敏, 川内秀之, 黒野祐一, 中島光好, ロラタジンの通年性アレルギー性鼻炎に対する臨床的検討ープラセボとケトチフェンを対照としてー, 耳鼻臨床 補, 107: 1-24, 2002
- (10) 積山幸祐, 花牟礼 豊, 笠野藤彦, 鹿島直子: 鼻性頭蓋内合併症の3例, 耳鼻臨床, 95(5): 473-479, 2002
- (11) 西元謙吾, 岩元光明, 唐木敦子, 黒野祐一, 西 恭宏, 森田康彦: 硬口蓋全欠損をきたした硬口蓋悪性腫瘍症例に対するプロテーゼ使用経験, 日本耳鼻咽喉科学会会報, 105: 1093-1096, 2002

2. 総 説

- (1) 黒野祐一：アレルギー性鼻炎診療における患者とのコミュニケーションのとり方，「現代医療」34，増刊Ⅱ，別刷，2002
- (2) 黒野祐一：鼻粘膜の免疫生理と病態，日薬理誌，120：7-12，2002
- (3) 黒野祐一，牛飼雅人：特集 小児の耳鼻咽喉科，Ⅳ．咽喉頭疾患，急性扁桃炎と扁桃摘出術，診断と治療社，小児科診療・別刷，65(9)：129-133，2002
- (4) 川内秀之，黒野祐一：鼻アレルギーの感作と発症に関する因子，日鼻誌，41(1)：65-66，2002
- (5) 黒野祐一：原布置保明，榎本冬樹，県談・滲出性中耳炎－マクロライド療法の可能性を探る，感染と抗菌薬，別刷，5(3)：200-208，2002
- (6) 黒野祐一，松根彰志：アレルギー性副鼻腔炎の概念と発症機序，MB ENT，17：7-11，2002
- (7) 黒野祐一：－アレルギー症候へのアプローチ－，鼻閉のメカニズム，アレルギー・免疫，9(1)：62-66，2002
- (8) 黒野祐一：特集 お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科Q&A，JOHNS，18(3)：430-431，2002
- (9) 黒野祐一：ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP，PISP），耳鼻咽喉科・頭頸部外科，74(1)：17-21，2002
- (10) 黒野祐一：診断・治療ガイドライン，アレルギー性鼻炎，臨床と研究（別冊），79(2)：19-22(207)-(210)，2002
- (11) 黒野祐一，松根彰志，出口浩二：抗ロイコトリエン薬・抗トロンボキサンA2薬の作用機序と適応，Progress in Medicine，22(2)，別刷，2002
- (12) 松根彰志，西元謙吾，黒野祐一：Th2サイトカイン抑制薬の作用機序と適応，Progress in Medicine，22(2)，別刷，2002
- (13) 松根彰志：慢性中耳炎．「耳鼻咽喉科診療プラクティス」9．小児の耳鼻咽喉科診療 編集 川城信子 96-98，2002

3. その他

松根彰志

紙上診察室「蓄膿」

南日本新聞，2002年10月16日

4. 国内学会発表

(1) 特別講演

第97回 日耳鼻大分県地方部会学術講演会 1月12日 (大分)
「上気道感染症に対するマクロライド療法 ―基礎と臨床―」
黒野祐一

都城市北諸県郡医師会内科医会 1月24日 (宮崎)
「アレルギー性鼻炎・花粉症とその周辺疾患」
黒野祐一

学術講演会 2月7日 (大阪)
「アレルギー性鼻炎・花粉症とその周辺疾患」
黒野祐一

宮崎医科大学講義 2月8日 (宮崎)
「免疫アレルギー」
黒野祐一

熊本県社会保険支払基金審査委員会学術講演会 2月20日 (熊本)
「上気道感染症に対するマクロライド療法の有用性」
黒野祐一

第8回 岐阜アレルギー疾患治療研究会 2月21日 (岐阜)
「アレルギー性鼻炎・花粉症とその周辺疾患」
黒野祐一

石川県耳鼻咽喉科医会学術講演会 2月23日 (金沢)
「上気道感染症に対するワクチン療法の現状と展望」
黒野祐一

第2回 和歌山感染免疫アレルギーセミナー 4月11日 (和歌山)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

アレルギー治療 学術講演会 4月19日 (新潟)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

第1回 山口県市中感染症研究会 4月25日 (山口)

「上気道感染症と粘膜免疫」

黒野祐一

アレルギー研修会 2002 4月27日 (和歌山)

「花粉症の最新治療の実際」

黒野祐一

宮崎アレルギー失陥研究会 6月6日 (宮崎)

「耳鼻科から見たI型アレルギーと抗原認識」

松根彰志

日本アレルギー協会東北支部秋田分会 第15回学術講演会 7月10日 (秋田)

「上気道におけるアレルギー性炎症」

黒野祐一

群馬県小児感染免疫研究会 第5回学術講演会 7月18日 (群馬)

「上気道感染症と粘膜免疫」

黒野祐一

出水郡薬剤師会生涯教育研究会 8月28日

「難治性鼻副鼻腔炎における最近の話題について」

松根彰志

学術講演会(鹿屋市, 肝属郡, 曾於郡, 肝属東部医師会) 9月19日

「アレルギー, 好酸球と難治性副鼻腔炎」

松根彰志

京セラリフレッシュセミナー 特別講演 10月5日

「今話題の睡眠時無呼吸症候群について」

松根彰志

指宿市薬剤師会学術講演会 10月11日

「アレルギー性副鼻腔炎と好酸球性副鼻腔炎について」～病態と薬物治療を中心に～

松根彰志

宮崎医科大学講義 10月15日

「上気道感染症ならびにアレルギー性鼻炎の診断と治療」

黒野祐一

第3回 上気道疾患懇話会 10月24日 (東京)
「上気道感染症の遷延化機序とその対策」
黒野祐一

出水郡内科医師会学術講演会 10月25日
「好酸球性副鼻腔炎と喘息」
松根彰志

世界杉環境サミット in 屋久島 11月8日
黒野祐一

第102回 九州医師会医学会
第7分科会・耳鼻咽喉科学会 11月17日
「アレルギー性副鼻腔炎の考え方」
黒野祐一

大分医科大学講義 11月19日
「口腔・咽頭・咽喉頭癌」
黒野祐一

大阪アレルギー性鼻炎フォーラム 2002 11月21日 (大阪)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

島根医科大学講義 11月25日
「粘膜免疫と耳鼻咽喉科領域の感染症」
黒野祐一

第258回 大分市小児科医会学術講演会 11月27日 (大分)
「小児上気道感染症の遷延化機序とその対策」
黒野祐一

熊毛地区医師会学術講演会 11月29日
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

みえアレルギーフォーラム 12月5日 (三重)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

大分医科大学講義 12月17日
「鼻の解剖と生理, 副鼻腔炎の診断と治療」
黒野祐一

(2) シンポジウム

第14回 日本アレルギー学会春期臨床大会 3月21日～23日 (千葉)
「Th2型免疫応答誘導における NALT の特異性」
福山 聡, 黒野祐一, 清野 宏

第2回 ラウンドテーブル「九州・中国鼻アレルギー」 3月31日 (福岡)
アレルギー性鼻副鼻腔炎の病態と治療
「慢性副鼻腔炎の発症メカニズム」
松根彰志

第20回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 3月7日～9日 (松江)
「鼻粘膜由来培養細胞における接着分子の発現とその制御」
牛飼雅人, 大堀純一郎, 松根彰志, 黒野祐一

第15回 日本口腔・咽頭科学会総会 9月14日～15日 (金沢)
「浸出性中耳炎の発症機序からみたアデノイド切除の有用性」
牛飼雅人

ワークショップ

(3) 一般

第12回 日本頭頸部外科学会・学術講演会 1月25日～26日 (金沢)
「深頸部腫瘍症例の統計学的観察と治療法の検討」
田中紀充, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 西元謙吾, 黒野祐一

第14回 気道病態シンポジウム 2月9日 (東京)
「ヒト鼻茸線維芽細胞における細胞接着分子の発現」
大堀純一郎, 牛飼雅人, 高木 実, 黒野祐一

第1回 旭川鹿兒島交流会 2月10日 (旭川)

「内視鏡下鼻内前頭洞手術の適応と手技」

田中紀充, 松根彰志, 黒野祐一

「頭頸部癌に対する定位的放射線療法の実用」

福岩達哉, 西元謙吾, 黒野祐一

「鼻茸由来培養細胞における接着分子の発現とその臨床的意義」

牛飼雅人, 大堀純一郎, 黒野祐一

「粘膜免疫誘導組織としての NALT の特異性」

福山 聡, 黒野祐一

第28回 睡眠呼吸障害研究会 2月16日 (東京)

「視床出血を来した閉塞性睡眠時無呼吸症候群の一例」

出口浩二, 田中紀充, 福岩達哉, 黒野祐一

第24回 鹿兒島感染症研究会 2月28日 (鹿兒島)

「当科における深頸部膿瘍症例」

田中紀充, 松根彰志, 宮之原郁代, 出口浩二, 黒野祐一

第20回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 3月7日～9日 (松江)

「NALT の形成と機能における LT と NIK の役割」

福山 聡, 黒野祐一, 廣井隆親, 識名 崇, 清野 宏

(大阪大学微生物病研究所免疫化学分野)

「ヒト鼻茸線維芽細胞における細胞接着分子の発現」

大堀純一郎, 牛飼雅人, 高木 実, 黒野祐一

「培養鼻粘膜上皮細胞および線維芽細胞からの VEGF の産生と制御」

孫 東, 松根彰志, 大堀純一郎, 田中紀充, 黒野祐一

第14回 日本アレルギー学会春季臨床大会 3月21日～23日 (千葉)

「副鼻腔陰影を有するアレルギー性鼻炎における薬物治療の評価」

松根彰志, 宮之原郁代, 黒野祐一

「ヒト鼻茸線維芽細胞における細胞接着分子の発現」

大堀純一郎, 牛飼雅人, 高木 実, 黒野祐一

第14回 日本喉頭科学会総会・学術講演会 3月22日～23日 (東京)

「高齢者に生じた喉頭原発 neuroendocrine carcinoma の一例」

西元謙吾, 森園健介, 黒野祐一

「当科における喉頭部分切除術の成績 – 病理学的検討と手術適応について –」

田中紀充, 西元謙吾, 黒野祐一

第103回 日本耳鼻咽喉科学会総会 5月16日～18日 (東京)

「アレルギー性鼻炎例における副鼻腔陰影とその末梢血および鼻汁中好酸球」

松根彰志, 永野広海, 早水佳子, 森園健介, 宮之原郁代, 黒野祐一

「咽喉頭異常感症に対するセディールの使用経験」

出口浩二, 平瀬博之, 福岩達哉, 松根彰志, 黒野祐一

「掌蹠膿疱症におけるケラチン特異的抗体産生能と予後」

岩坪哲治, 田中紀充, 黒野祐一

「アデノイド線維芽細胞におけるNF- κ Bの活性化とIL-8発現」

高木 実, 大堀純一郎, 牛飼雅人, 黒野祐一

第22回 気道分泌研究会 6月1日 (熊本)

「アデノイド線維芽細胞におけるNF- κ Bの活性化とIL発現」

林 多聞, 高木 実, 牛飼雅人, 松根彰志, 黒野祐一

日本耳鼻咽喉科学会第17回九州連合地方部会学術講演会

第1回 鹿児島県地方部会学術講演会 6月13日～14日 (宮崎)

「放射線誘発 (Radiation induced) が疑われる癌症例について」

林 多聞, 西元謙吾, 福岩達哉, 出口浩二, 黒野祐一

「掌蹠膿疱症におけるケラチン特異的免疫応答」

田中紀充, 岩坪哲治, 林 多聞, 黒野祐一

第26回 日本頭頸部腫瘍学会, 第23回頭頸部手術手技研究会 6月12日～14日 (東京)

「甲状腺原発髄外性形質細胞腫の一症例」

福岩達哉, 下麥哲也, 岩元光明, 西元謙吾, 黒野祐一

「耳下腺内リンパ節転移をきたした悪性髄膜腫の一例」

大堀純一郎, 出口浩二, 西元謙吾, 牛飼雅人, 黒野祐一

「中咽頭扁平上皮癌における頸部リンパ節転移の臨床病理学的検討」

谷本洋一郎, 福岩達哉, 西元謙吾, 黒野祐一

第64回 耳鼻咽喉科臨床学会 6月28日～29日 (大阪)

「成人に発症した頸部多房性嚢胞性疾患の2症例」

西元謙吾, 福岩達哉, 出口浩二, 黒野祐一

「高齢者の扁桃周囲膿瘍症例の検討」

早水佳子, 宮之原郁代, 福山 聡, 出口浩二, 黒野祐一

「診断に苦慮したツツガムシ病の一例」

永野広海, 出口浩二, 宮之原郁代, 牛飼雅人, 黒野祐一

- 第9回 マクロライド新作用研究会 7月19日～20日 (東京)
「低酸素下培養線維芽細胞からの VEGF 産生におけるマクロライドの影響」
牛飼雅人, 孫 東, 大堀純一郎, 松根彰志, 黒野祐一
- 第32回 日本耳鼻咽喉科感染症研究会, 第26回日本医用エアロゾル研究会 9月6日～7日 (広島)
「LPS に対する口蓋扁桃の免疫応答」
田中紀充, 福山 聡, 牛飼雅人, 黒野祐一
- 第15回 日本口腔・咽頭科学会総会および学術講演会 9月13日～15日 (金沢)
「早期治療が必要であった OSAS の二症例」
出口浩二, 田中紀充, 林 多聞, 黒野祐一
「耳下腺 salivary duct carcinoma の1例」
林 多聞, 出口浩二, 牛飼雅人, 黒野祐一
「掌蹠膿疱症におけるケラチン特異的免疫応答の解析」
岩坪哲治, 林 多聞, 田中紀充, 黒野祐一
「下極型扁桃周囲膿瘍の臨床的特徴について」
早水佳子, 宮之原郁代, 福山 聡, 黒野祐一
- 第41回 日本鼻科学会 9月26日～28日 (広島)
「NALT 形成における CD3⁻CD4⁺CD45⁺細胞の役割」
福山 聡, 廣井隆親, 清野 宏, 黒野祐一
「術前抗アレルギー剤投与による鼻茸への好酸球浸潤の改善について」
吉福孝介, 松根彰志, 相良ゆかり, 宮之原郁代, 黒野祐一
「ヒト鼻茸線維芽細胞における VCAM-1 発現の検討」
大堀純一郎, 牛飼雅人, 高木 実, 黒野祐一
「低刺激酸素による鼻茸線維芽細胞からの VEGF 産生とその制御」
孫 東, 松根彰志, 大堀純一郎, 牛飼雅人, 黒野祐一
- 第12回 日本耳科学会学術講演会 10月10日～12日 (東京)
「小児急性中耳炎に対する抗生剤投与の有無とその予後」
牛飼雅人, 宮之原郁代, 松根彰志, 黒野祐一
「当科における小児浸出性中耳炎の検討」
相良ゆかり, 出口浩二, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 黒野祐一
「顔面神経麻痺と伴った中耳腺腫の1例」
福山 聡, 出口浩二, 黒野祐一
- 第2回 鹿児島めまい研究会 10月25日 (鹿児島)
「聴神経腫瘍の臨床統計的検討」
谷本洋一郎, 宮下圭一, 原田みずえ, 宮之原郁代, 黒野祐一

第54回 日本気管食道科学会・学術講演会 11月7日～8日 (大阪)

「甲状腺に穿通した下咽頭魚骨の1例」

福山 聡, 福岩達哉, 林 多聞, 松根彰志, 黒野祐一

「ラリングマイクロサージェリーにおける XPS ドリルの使用経験」

大堀純一郎, 福岩達哉, 牛飼雅人, 松根彰志, 黒野祐一

第52回 日本アレルギー学会総会 11月28日～30日 (横浜)

「アレルギー性鼻炎例における CD116または, CD123陽性樹状細胞について」

松根彰志, 佐藤克明, 孫 東, 西元謙吾, 松山隆美, 黒野祐一

「当科における好酸球性副鼻腔炎例の診断と治療」

積山幸祐, 松根彰志, 吉福孝介, 宮之原郁代, 牛飼雅人, 黒野祐一

南九州腫瘍研究会 第5回 学術集会 12月2日 (鶴陵会館)

「中咽頭扁平上皮癌における頸部リンパ節転移の臨床病理学的検討」

谷本洋一郎, 福岩達哉, 西元謙吾, 黒野祐一

第23回 日本レーザー医学会総会 11月29日～30日 (大阪)

「睡眠障害に対する外来レーザー手術」

出口浩二, 松根彰志, 黒野祐一

第47回 小児耳鼻咽喉科研究会 12月7日 (東京)

「当科における小児滲出性中耳炎のアデノイド切除に対する検討」

相良ゆかり, 出口浩二, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 黒野祐一

「小児副鼻腔炎におけるアレルギー性疾患の関与」

谷本洋一郎, 松根彰志, 宮之原郁代, 黒野祐一

第9回 マクロライド新作用研究会 7月19日～20日 (東京)

「低酸素下培養鼻粘膜腺維芽細胞からの VEGF 産生におけるマクロライドの影響」

牛飼雅人, 孫 東, 大堀純一郎, 松根彰志, 黒野祐一

5. 国際学会発表

7th Asian Research Symposium on Rhinology February 15-16, 2002 (Kute-Bali Indonesia)

「Lymphotoxin and NIK independency of NALT organogenesis」

Satoshi Fukuyama, Hiroshi Kiyono, Yuichi Kurono

EUROPEAN RHINOLOGIC SOCIETY June 15-21, 2002 (Munchen Germany)

「Application of Cyberknife for the Tretment of Juvenile Nasopharyngeal Angiofibroma:A Case Report」

Kouji Deguchi MD, Tasuya Fukuiwa MD, Yuichi Kurono MD

The 6th International Academic Conference on Immuno-&Molecular Biology in Otorhinolaryngology October 17-20, 2002 (Korea)

「Molecular mechanisms in the expression of inflammatory cytokines from adenoids」

Y.kurono, M.Ushikai, M.Takaki

「Production of Vascular Endothlial Growth Factor (VEGF) from Human Nasal Fibroblasts under Hypoxic Condition」

S.Matsune, Dong Sun, K.Sekiyama, K.Yoshifuku, M.Ushikai, Y.Kurono

「The role of CD3⁻CD4⁺CD45⁺ cell for the initiation of NALT development」

S.Fukuyama, T.Hiroi, H.Kiyono, and Y.Kurono

11th International Congress of Mucosal Immunology June 16-20, 2002 (Orlando Florida, USA)

「Initiation of NALT Organogenesis Is Independent of the IL-7R, LT 1 2/LT R and NIK Signaling Pathways but Does Require the Id2 Gene and CD3⁻CD4⁺CD45⁺Cells」

S.Fukuyama, T.Hiroi, Y.Yokota, Paul D.Rennert, M.Yanagita, N.Kinoshita, S.Terawaki, T.Shikina, M.Yamamoto, Y.Kurono, and H.Kiyono

VII International Academic Otologic Workshop on Interactions between the Middle Ear and the Inner Ear August 29-31, 2002 (Umea, Sweden)

「Molecular mechanisms in the expression of inflammatory cytokines from adenoids」

Y.Kurono

THE 19TH CONGRESS OF PAN-PACIFIC SURGICAL ASSOCIATION JAPAN CHAPTER October 27-29, 2002 (Hawai)

「APPLICATION OF PECTORALIS MAJOR MUSCULAR SKIN FLAP FOR OROMANDIBULAR RECONSTRUCTIVE SURGERY」

Y.Kurono, K.Nishimoto, T.Hayashi, K.Yoshifuku

[APPLICATION OF POWERED INSTRUMENTS FOR THE TREATMENT OF LARYNGEAL GRANULOMA]

T.Fukuiwa, M.Ushikai, K.Deguchi, Y.Kurono

[ENDOSCOPIC SINUS SURGERY FOR POST-OPERATIVE MAXILLARY CYSTS]

T.Hayashi, S.Matsune and Y.Kurono

[THE EFFECTS OF ENDOSCOPIC SINUS SURGERY ON OLFACTORY DISTURBANCE]

K.Yoshifuku, S.Matsune, K.Sekiyama, J.Ohori, K.Morizono, Y.Kurono

6. 学位論文要旨

医研第523号

Initiation of NALT Organogenesis Is Independent of the IL-7R, LT β R, and NIK Signaling Pathways but Requires the Id2 Gene and CD3⁻CD4⁺CD45⁺ Cells.

NALT 初期形成は IL-7R, LT β R 及び NIK を介するシグナル伝達系に依存しないが, Id2 遺伝子と CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞を必要とする

福 山 聡

【目的】 リンパ節やパイエル板における組織形成には IL-7R と LT β R やその細胞内シグナルである NIK が必須の分子であり, CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞が二次リンパ組織形成の誘導細胞ではないかと考えられている。しかし上気道の二次リンパ組織である鼻咽腔関連リンパ組織 (NALT) の組織形成メカニズムはほとんど明らかにされていない。そこで様々なリンパ組織欠損マウスを用いて NALT 形成における IL-7R, LT β R, NIK などのサイトカインネットワークそして CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞の関与について検討した。

【方法】 野生型, IL-7R^{-/-}, LT α ^{-/-}, LT β ^{-/-}, LT β R-Ig 処理マウス, *aly/aly* および Id2^{-/-} マウスから鼻腔の組織切片を作成し, 組織学的に NALT 形成を検討した。さらに抗 PNA_d 抗体を用いて免疫組織学的に NALT の発達について検討した。野生型マウス, LT α ^{-/-}, *aly/aly* マウスの NALT から単核球を分離しフローサイトメリー (FACS) で T 細胞, B 細胞, 樹状細胞等の細胞分画について比較検討した。また野生型マウス, IL-7R^{-/-}, LT α ^{-/-}, Id2^{-/-} マウスの NALT の CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞の存在について FACS および免疫組織学的に検討した。さらにこれらの成績をもとに胎生期肝細胞また CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞を Id2^{-/-} マウスに移入し NALT 形成を試みた。

【結果】 野生型マウスの NALT 原基は生後 1 週目で認められた。IL-7R^{-/-}, LT α ^{-/-}, LT β ^{-/-}, LT β R-Ig 処理マウスおよび *aly/aly* マウスに NALT が認められたが, PNA_d 低発現の未発達な NALT であった。LT α ^{-/-}, *aly/aly* マウスの NALT では野生型と比較して T/B 細胞比が大きかった。Id2^{-/-} マウスには CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞と NALT を認めなかった。胎生期肝細胞または CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞を移入した Id2^{-/-} マウスに NALT 形成を認めた。

【考察】 リンパ節やパイエル板欠損モデルマウスである IL-7R^{-/-}, LT α ^{-/-}, LT β ^{-/-}, LT β R-Ig 処理マウス, *aly/aly* マウスに NALT が認められたことから, NALT 形成はこれまで知られていたリンパ組織形成メカニズムとは全く異なった IL-7R, LT β R および NIK を介するシグナル伝達系に依存しない機構が存在することが明らかになった。CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞を移入した Id2^{-/-} マウスに NALT 形成が誘導されたことから, CD3⁻CD4⁺CD45⁺ 細胞が NALT 形成に直接関与していることが明らかとなった。

(Immunity 17 卷 1 号 2002 年掲載)

1. 新入医局員紹介

宮 下 圭 一



自己紹介：卒業したらどの科に入局するかで悩み、耳鼻咽喉科に決めてからは、大分医科大学に残るか、鹿児島大学の耳鼻咽喉科に入局するかは最後まで悩みました。もうすぐ1年が過ぎようとしていますが、素晴らしい先生方に恵まれ、自分が選んだ道に満足しています。耳鼻咽喉科・頭頸部外科は奥が深く、まだまだ半人前ではありますが、手術、手技をしっかり学び、一人前の耳鼻咽喉科・頭頸部外科医になれるよう頑張りたいと思います。これからも御指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

原 田 みずえ



自己紹介：入局してから早いもので、1年が経ってしまいました。昨年の入局する前の3月末、私は漠然と外科系（特に耳鼻科）にいきたいと思っていたのですが、麻酔科で少し勉強してからにしようと考えていましたので、全く耳鼻科の医局説明会等には顔を出しませんでした。しかしいろんな人たちの意見を聞いているうち、耳鼻科に気持ちが傾いてきて、入局することを決めました。医局の先生方も急に一人入局する者がいるとわかって、大変驚かれたと思います。はじめは、わからないことばかりで、先生方に大変ご迷惑をおかけして、自分にはむいていないのではと何度も悩みましたが、ようやく仕事にも慣れてきたようにおもいます。まだまだこれからも多々ご迷惑をかけるとは思いますが、ご指導よろしく願いたします。

2. 医局人事（平成15年6月現在）

教 授	黒野祐一
助 教 授	松根彰志
講 師	牛飼雅人，宮之原郁代
助 手	出口浩二，相良ゆかり，福岩達哉
医 員	林 多聞，吉福孝介，積山幸祐
国内留学 研 修 医 大 学 院 生	福山 聡（東京大学医科学研究所） 原田みずえ，宮下圭一，川島雅樹 大堀純一郎，田中紀充，早水佳子，孫 東
医 局 長	福岩達哉
外 来 医 長	牛飼雅人
病 棟 医 長	出口浩二

関連病院（平成15年6月現在）

国立病院九州循環器病センター	（副院長：勝田兼司） 松崎 勉，森園健介
国立療養所星塚敬愛園	上村隆雄
県立大島病院	西元謙吾，下麥哲也
鹿屋医療センター	平瀬博之，谷本洋一郎
県立北薩病院	大城 浩
出水市立病院	関 大八郎，高木 実
済生会川内病院	岩元光明
鹿児島生協病院	江川雅彦，唐木敦子
藤元早鈴病院	岩坪哲治
あまたつクリニック	河野もと子
今村病院分院	早水佳子

3. 学会報告

第12回日本頭頸部外科学会総会・学術講演会

相 良 ゆかり

今回、私たち（谷本、積山、林、相良）は奥州仙台、仙台国際センターで開催された日本頭頸部外科学会に参加させていただきました。

1月の仙台は、凍えるほど寒く、また近年まれにみる大雪にみまわれ、南国育ちの私たちにとってはとても厳しい仙台訪問となりました。仙台駅に着くやいなや大雪に度肝を抜かれ、うまく歩くことができず、タクシーに乗るのにも大変苦労しました。

さて、今回のビデオセミナーでは、第1日目でアデノイド切除術や、口蓋扁桃摘出術において、新しく手術器具を用いることでその有効性を解りやすく説明していただきました。

また、側頭骨手術に対しては、実際のビデオを見ながら手術手技に沿って landmark 及び、内耳や、顔面神経へのアプローチを解りやすく説明して頂き、なんとなく解剖が頭の中で立体的に組み立てられたような気がしました。ワークショップでは、当科でも議論となるところの下咽頭・頸部食道癌において、どこまで根治治療を目指すか、QOL をどのように考えるか等、手術の適応を含めた問題点を提示されていました。

そして最後に、やはり強く印象に残っているのは、東北地方の新鮮な魚貝類。あんなに美味しいものはこれまで食べたことがありません。・・・なんとも言えず美味しかった！！

第14回気道病態シンポジウム

大 堀 純一郎

本学会は東京で、開かれた。気道病態発現、修復の制御機構に関する最近の進歩というテーマであった。演題数は10台と少ないながらも、発表10分、討論10分の持ち時間が

足りないほどの活発な討論が繰り広げられ、とても活気のあるシンポジウムであった。耳鼻咽喉科だけでなく、下気道を取り扱う内科の先生の発表もいくつかあり、上気道と下気道の相違、慢性閉塞性肺疾患、喘息等の最近の知見を知ることができるシンポジウムであった。

たくさんの演題があり、どの部屋の演題を聴くか迷う学会よりも、一つ一つに集中でき、何よりも、この分野で日本のトップの先生方のディスカッションを聞くことができ、大変勉強になった。いずれ、このようなディスカッションに加われるように精進したいとちょこっと思った。

第15回気道病態シンポジウム

田 中 紀 充

平成15年2月2日、東京にて行われた。私は、口蓋扁桃単核球におけるTLRの発現と細菌抗原に対する免疫応答という演題で発表させていただいた。他の学会と異なり、討論の時間が長く設けてあり、答えにつまり、立ち往生した。しかし、質問を頂いた先生と、免アレ（鹿児島）にて、再度ディスカッションすることが出来て、大変勉強になった。

第20回日本耳鼻咽喉科アレルギー学会

大 堀 純一郎

本学会は、神々の集まる出雲大社のある島根県で開かれた。日本の耳鼻咽喉科の神々たちも一同に会していた。鹿児島大学からは、黒野教授、松根助教授、牛飼先生、福山先生、孫先生、私の6人が参加した。今学会にて、本学会には2回目の参加であったが、免疫アレルギーの分野の基礎研究から臨床研究まで幅広い演題が多数あり、各大学の活発な研究姿勢をうかがい知ることができた。

本学会にて私は、貴重な体験をすることができた。それは、今までの私の経験の中で一番小さな飛行機に搭乗できたことである。元来乗り物好きなき私は、福岡～松江間の13人乗り飛行機に心ときめかせていた。機内は狭く、持ち込み荷物がシートの下に入らないほどで、座席を前のほうでと希望すると、「バランスが崩れるので、指定の座席をお願いします。」といわれるしまつであった。もちろんスチュワーデスはおらず、機内アナウンスは客席とつながっていて計器が丸見えのコックピットに座っている機長のアナウンスであった。日ごろの研究をがんばったご褒美に思えた。さらに、いろんな場所、乗り物に乗れるよう精進する気にさせてくれた。

第21回日本耳鼻咽喉科アレルギー学会

早水佳子

今学会は、皆さん御存知の通り、我が鹿児島にて、2月13、14、15日の3日間にわたり行われました。城山観光ホテルの地にて、会場を一つにして行うという一風変わった形式を取りました。と言うのも、会場を一つに絞ることで、可能となる事を期待してのことでした。それは、参加者が全てのプログラムに耳を傾けることができ、かつ、会場の人数が増えると、より盛大なディスカッションも可能となるのでは…といった二つのねらいです。この考えは見事に功を奏し、事実、多数の方が会場を埋め、質疑応答の時間が足りない程で、座長の先生方も時間のやり繰りに頭を悩ませていた様です。

鹿児島は、やはり南国なのでしょう。皆さん、口を揃えて気候の暖かさをおっしゃっておられました。また、この日のために、医局の先生方は四方八方に連絡を尽くし、鹿児島ならではの持て成しをと、珍しい料理や、滅多に御目に掛かれない焼酎を準備されていたようです。その甲斐あって、皆さん、逸品を口にされるに付け、喜んでおられる姿を多々目にしました。

最後に、免疫学と言うのは、今やグローバルな分野であり、人間の神秘というか、奥ゆかしい不思議な力を感じる世界という気がしました。その最先端を垣間見ることが出来た場面でもありました。そう、教科書や、文献などでしか触れた事のない有名な先生方が、実際に目の前に実在され、マイクを通して生の声を耳にすることが出来る。こん

な機会はそうそう，めぐってこないと思います。

南国の暖かい陽気な力が，多数の先生の足を鹿児島へと向かわせ，そして，意気盛んな活気ある発言の飛び交った場にしてくれたのだと感じました。最初は，どうなることかと，医局員一同で，何度かミーティングを重ね学会に臨みましたが，今振り返ってみると，手前味噌かもしれませんが，大成功のうちに幕を閉じたのではないかと胸を撫で下ろしている所です。

第14回日本喉頭科学会総会

田 中 紀 充

平成14年3月22日，23日に東京商工会議所にて開催されました。

当医局からは西元謙吾先生と私が参加させていただきました。同日に，日本アレルギー学会春季臨床大会が開かれており，参加者が極端に少なかったような気がします。当然，参加されている先生は，その道の玄人のみで，激しい討論が交わされました。私は，喉頭部分切除術について発表しましたが，今後，機能温存が要求されてくる時代の中で，症例ごとに今回学習した事を踏まえて，臨床に望みたいと思っています。

第14回日本アレルギー学会春季臨床大会

大 堀 純一郎

第14回日本アレルギー学会春季臨床大会は，千葉大学がホストになり幕張メッセで行われた。日本アレルギー学会は，耳鼻咽喉科の先生だけでなく，内科，皮膚科の先生方も参加される学会で規模も大きく，これまで参加した学会の中で一番大きな学会であった。本学会には，鹿児島大学からは，黒野教授，松根助教授，福山先生と私の4人が参加した。同時期に喉頭科学会に参加していた田中先生も一部参加された。福山先生は「アレルギー疾患における抗原認識の臓器特異性」というシンポジウムにてシンポジス

トをされた。これまでの学会でよく目にする先生方と一緒に壇上でディスカッションをする先生をみて、ただ感心するのみであった。

一番印象に残った講演は、今野昭義先生の会長講演だった。先生は鼻アレルギーに関してちょうど今の私と同じくらいの年代からの研究を、威厳のある声で詳しく講演してくださいました。現在、私が教科書等で目にするのある研究のスライド等もあり、教科書を書く程の先生の話の話を直に聞くことができたすばらしい体験であった。

アレルギー科として、喘息、アトピー性皮膚炎、鼻アレルギーの最新の知見を間近に見聞し、大変勉強になる学会であった。

第103回日本耳鼻咽喉科学会総会

出口 浩 二

今回の総会は順天堂大学が主催でホテルニューオータニで行われました。さすがに総会と言うこともあり会場が多岐に分かれ、演題の quantity, quality とともにレベルの高さを実感いたしました。

特別講演も総会の特徴と思われませんが、他領域からの講演を目にする事が多いのですが、今回もホンダの誇るヒューマノイドロボット「アシモ」の開発過程、今後の展望についての竹中 透先生の御講演を拝聴することが出来ました。学術的な部分もいくつか印象にあるのですが本稿でこの特別講演での印象を述べたいと思います。

この御講演の中で私にとって意外だったのは（勉強不足もあるのですが）、二足歩行のロボットを動かすにあたって、その姿勢制御が問題であったということです。すなわち、片足が地面から上がっているとき、一本の足でバランスを如何に保つかという点です。最近では商業でもこの「アシモ」を目にする事が有り、ふつうに歩いているのを見て自然に思い、何の疑問も持たなかったのですが、この自然に歩くという行為が如何に大変なことか今回強く印象づけられました。まさにバリアフリーでない開発当初のロボットは、すぐ転けていたというのです。それが今のロボット「アシモ」は階段を昇降できるまでのレベルまで来ているのです。

われわれ耳鼻咽喉科医はめまいの診療も日常的に行っておりますが、このめまい症状

は「アシモ」に至る開発過程のロボットに相通じるところがあるのではないかと感じました。如何に人間の体は巧妙に出来ているか、本講演をきいて改めて認識させられました。学生時代、生理学の教授にヒトが立ち上がって歩くまでの過程を生理学的に説明しなさいと言った質問をされた記憶があり、それなりに勉強したつもりでしたが、本講演は私にとっては目から鱗が落ちるような内容でした。

第26回頭頸部腫瘍学会

谷本 洋一郎

第26回日本頭頸部腫瘍学会は、平成14年6月12、13、14日の日程で、千葉市幕張メッセ国際会議場で開催されました。当科からは、黒野教授をはじめ、福岩先生、大堀先生とともに参加しました。この学会は自分にとって初めての学会で、しかも「中咽頭扁平上皮癌における頸部リンパ節転移の臨床病理学的検討」などという重いテーマであったため学会前はずいぶん大変な思いをしました。しかし、実際参加してみると難しい話しも多かったですが、ビデオシンポジウムなどわかりやすく興味を引かれる演題も多々あり、有意義な3日間でした。夜は東京の町にくり出したわけですが、ちょうどワールドカップで盛り上がっているときで、どこに行ってもサッカー一色でした。そんな中、福岩先生と大堀先生と毎日飲みに行ったのをよく覚えています。いろんな意味でこの学会は自分にとって将来振り返ってもかなり印象深い学会になると思います。

第64回耳鼻咽喉科臨床学会

永野 広海

H14年6月に大阪にて開かれた第64回耳鼻咽喉科臨床学会に行かせていただきました。初めての全国学会ということで緊張しましたが、出口先生をはじめ、多数の先生方のご指導により、無事に発表させていただきました。

全国から多数の先生が来られ、多数の演題を聞いた自分にとっていい刺激になりました。

今後とも機会があれば、できるだけ参加していきたいです。

第15回日本口腔咽頭科学会総会

早水佳子

今学会は、私にとって2回目の全国学会であり、金沢の地にて平成14年9月14、15日に開かれました。2回目の学会ともなると、初めての時とは少しは違い、回りを見る余裕も出てきた感じでした。所が、生憎、天気は曇り、もしくは雨とといったぐずついた日ばかりが続きました。しかし、やはり北に位置するだけあって、暑くも寒くもなく過ごしやすい気候に恵まれました。

金沢の地は、二度目でしたが、前は学生時代に部活の試合のために、ホテルと体育館との往復しか記憶がなく、今回が事実上、初の金沢と言った感じでした。

巷では、日本の裏京都と言われるだけあり、大通りを少し離れると趣のある木造作りの低い屋根が軒を連ねていました。また、海沿いのこの土地は、食べ物も美味しく、新鮮な魚介類が考えられない程の格安の値段で口にすることができ、感動もまたひとしおでした。偶々、昼食に立ち寄ったお寿司屋さんにて、「これでもか、これでもか。」と言わんばかりに具が御飯へと乗せられていく様を目にした私は、溜息とも驚嘆とも付かない声を上げては、一人はしゃいでいました。

発表の方とは言う、諸先輩先生方に見守られながら、無事に終えることが出来ました。私に、質問して下さった先生とは、その後行われた懇親会の席にて、挨拶に伺ったのがきっかけで、今では、違う会場でお会いするにつけても、お声を掛けて下さる程になりました。私のかけがえのない財産の様な気がして、今学会のお陰に尽きると思っています。

帰りは、飛行機の時間の関係上もあり、バタバタとせわしく会場を後にしましたが、有意義な時が過ごせました。また、今学会は、パネルディスカッションが充実しており、一つの事柄に対して、たくさんの意見を耳にする事ができました。私の凝り固まった

一片等の考え方や物の見方も少しはほぐれたのではないかと考えています。
最後に、この様な素晴らしい機会を与えて下さった医局に感謝致します。

第41回日本鼻科学会総会

吉 福 孝 介

平成14年9月26から28日に広島で主催された第41回日本鼻科学会総会に、黒野教授
松根助教授 福山先生 孫先生 大堀先生 私 吉福で参加させて頂いた。

第1日目は、広島空港に向けて第1便で出発した。かなり小さい飛行機でありかなり
ゆれてしまい少し驚いてしまった。到着すると、まだホテルのチェックインが出来ず、
夜であれば賑やかであろう人のとても少ない広島の繁華街をブラブラした後に、
Mc Donaldで朝食を食べた。

その後にホテルにて念願のチェックインした後、原爆ドームの近くの学会場に向かっ
た。学会場にて、講演を聴き非常に勉強になった。夜は懇親会に出た後にホテルの近く
に見つけた温泉に入り、ホテルでぐっすりと眠った。第二日目は、参加した他の先生と
自分の発表であった。無事発表を終了した後 松根助教授と他の先生でお好み焼きを食
べに行った。すべて松根助教授におごって頂き、あり難く思った。

3日目も学会に出席し、その後鹿児島に帰った。チナミに自分は、飛行機は酔うので
新幹線とつばめで帰らせてもらった。

第12回日本耳科学会総会

宮 下 圭 一

あれは10月の北風が吹き付ける寒い日だったと記憶しております。平成14年10月10日
～12日に東京の京王プラザホテルで開催された日本耳科学会に黒野教授、相良先生、福
山先生宮下の4名で参加しました。初めての学会で何もわからないほくは、羽田空港に

着くと、まず1回目の失態に気付かされたのでした。鹿児島空港で手荷物（大きなスーツケース）をANAのグランドホステスに預けてしまっていたのです！！同行の先生方を外で待たせ、おまけに何度か金属探知機に足止めをくらうわで結局次の便の乗客と同じ時間になってしまったのでした・・・。

東京の町をさっそうと足早に歩いていく黒野先生と相良先生、福山先生のあとをスーツケースを片手に人だかりの中、見失わないようくっつきながら学会会場へ到着したのでした。

次の日、学会会場はちょうど都庁の真正面にあったので、早速、お昼に相良先生と都庁へ登ったのでした。

相良先生：「ほら、あれが都庁だよ。大きいねえ宮下くん」

宮 下：「鹿児島でいう城山から眺めてると同じくらいのもんですかねー？」

相良先生：「いやいやいや何を言ってるの、もっと高いわよー」

なーんてどうでもいいような話に花が咲き、耳科学会のことはすっかり頭から消えてしまっていました。その日合流した下麥先生とも再度都庁へ足を運び、都庁づくしの耳科学会でした。耳科学会では多方面の耳に関する興味深い話がたくさん聞け、とても充実した3日間でした。

第54回日本気管食道科学会総会

原 田 みずえ

第54回日本気管食道科学会総会が平成14年11月7日、8日の2日間にわたり、大阪国際会議場にて開催されました。当科からは黒野教授、福山先生、大堀先生と私の4人で参加させてもらいました。私は発表はありませんでしたが、初めての学会参加、そして私にとって初めての大阪と言うことで、いささかワクワクしていた様に思います。鹿児島を発つ時、鹿児島空港で出水にいらっしゃる関先生とお会いし、大阪については関先生、福山先生、大堀先生と行動を共にしました。1日目の夜は店と場所の雰囲気は

覚えています、何を食べたか忘れてしまいました……。2日目の夜は一度行ってみたかった道頓堀にいきました。私のイメージとは違い、狭く短い橋でちょっとばかり拍子抜けしてしまいました。そして、次に行ってみたかったのが、かに道楽。ちょっと恥ずかしかったのですが、かに道楽のでっかいカニの前で写メールを撮ってみました。ちょっと暗くてぼんやりとしか写らず残念でしたが、カニはおいしかったし、川沿いの店からの道頓堀の眺めも良く、いい思い出になりました。

学会のほうはというと、まず福山先生が「甲状腺に穿通した下咽頭魚骨の一例」というタイトルでなんなく発表した後、当科でXPSドリルを用いた症例についての大堀先生の発表でしたが、それまで割りと空いていた客席が急に埋まり、会場に入りきれずに立ち見が出るほど人が集まり、なんだ？なんだ？と驚いてしまいました。そんな人の多さやプレッシャーに負けることなく質問にもしっかり答えていて、感心してしまいました。

そして無事に発表も終わり、他の発表を聞き、しっかり勉強した後、白い犬のキャラクターのいるテーマパークに行ったのはいうまでもありません。

第52回日本アレルギー学会総会

積山幸祐

2002年11月28日（木）から30日（土）まで3日間にわたり、横浜市みなとみらいのパシフィコ横浜にて第52回日本アレルギー学会総会が開催されました。医局からは松根先生と私が参加させていただきました。アレルギー疾患の病因と治療－基礎研究の進歩とその臨床応用はどこまで進んだか－を大きなテーマに、アレルギー疾患の病因解明や21世紀のアレルギー疾患の新しい治療法などを中心とした招待講演、特別講演、シンポジウム等が、盛りだくさんでした。

初めての参加でしたが、基礎や内科を中心とした非常に学術的な学会との印象を受けました。

夜の食事のほうも盛りだくさんで、中華街をたっぷり満喫でき、個人的な話もたくさん聞け、おなかも頭も満腹になった学会でした。

2002 ISIAN（ドイツ・ウルム）に参加して “I'm シューマッハー”と“サッカーワールドカップ”

出口 浩 二

入局してから今日に至るまで、国際学会は数回経験させていただきましたが、いずれもアジアでの学会で、今回ヨーロッパ、ドイツでの ISIAN は私にとっては、これまでの国際学会とは一種趣の違うものとなりました。その中で特に印象に残った二点を紹介させていただきますと思います。

今回、往路は鹿児島、福岡（泊）、成田、フランクフルト、シュツットガルト（泊）を經由してアルプスのふもとの学会の開催地であるウルムへ向かいました。この往路でまず忘れられないのが、シュツットガルトのタクシードライバーです。

シュツットガルトに到着したのが22：00を過ぎた頃と記憶しています。早い時間であれば鉄道を利用することも可能だったのかもしれませんが、タクシーでホテルへ移動しました。大分医大の先生方と空路は一緒だったため、教授と私はそれぞれ別れ、大分医大の先生方と二台のタクシーに分乗しました。タクシーに乗った当初はふつうの運転だったのですが、日本の交通事情などたどたどしい英語で話ながら途中から急にスピードをあげ始めました。制限速度60km/h位の公道を高速らしき道路からおりた後も、100km/hを下回る事のないスピードで猛進。前の車が遅いと判断するやいなや、通常車線ではなく路側帯じゃないかと思うところを突っ切って追い越しをかけぐんぐん進んでいくのです。圧巻だったのが、信号が黄色から赤に変わる交差点にさしかかったとき、左折しなければならなかったのですが、全くブレーキを踏むことなく見事に90°曲がりきったことです。（一瞬横転するのではないかと思うほど車体自体は傾きましたが・・・）何でタクシーに乗りながらここまでGを感じなければならぬかと思いつつ、で、怖いしそこまでスピードを出さなくてもと言うことを何とか伝えようと話しかけてドライバーから戻って来た言葉が「I'm シューマッハー」でした。この言葉を聞いた瞬間から、ホテルに着くまで事故したときの補償など、有事のことばかり考え、まったく土地感はなく当然どこら辺にあるか見当のつかないホテルに着くことばかり考えていました。時間は恐らく15～20分くらい乗っていたんではないかと思いますが、かなり長い時間安全の保証のないジェットコースターへ乗っていたような気分というのが実感です。教授のタ

クシーが先に出ていたのですが、当然私たちのタクシーが先にホテルに着きました。申し遅れましたが私は助手席に乗りました。つくづくタクシーであっても、運転のわからない人の車の助手席には乗るもんじゃないというのが、今回の教訓でした。

続いて印象に残った二番目です。

今回の ISIAN は“ワールドカップ日韓共催”という歴史的イベントと会期が重なっていました。私たちが鹿児島を発つ当日もベルギー戦があり、その結果を胸に鹿児島を立ちました。このころの日本の雰囲気もかなりヒートアップしている印象でした。しかしドイツの地にたってみて、目に入ってくるワンシーンワンシーンをみると、つくづく日本の段じゃないというのが実感でした。ウルムでの学会会期中、日本が予選を突破して決勝トーナメントへ突入。トルコ戦が行われました。ちなみに学会中の話題もワールドカップの結果のことを耳にすることがほとんどでした。

試合ではトルコが日本に勝ちましたが、その試合の後、教授とウルムの街へ出ていたところ、キャンバストップの車の天井をあけ、トルコ人がトルコの国旗を大きく振り、クラクションを鳴らしながら町中を凱旋していました。その中で、我々が日本人と解ったのか指を指しながら、我々に何かをアピールしようとする輩もおり、異様な雰囲気でした。日本が試合に負けたのは残念ではありますが、もし試合に勝っていて彼らトルコ人と遭遇していたらどうなっていたら考えさせるほどの街の雰囲気でした。

最後に今回のドイツは異常気象と言われるほど、暑かったです。日々、日中の気温が36度を超え、暑がり汗かきの私にはとてもつらいものでした。最後にその暑かったドイツの風景を紹介して本稿を閉じたいと思います。



ウルムの街並み



学会場であるホテルからの眺め



ミュンヘン駅構内



Inter City Express (ICE)



ICE の車内と教授の後ろ姿



ミュンヘンの street car と教授



ヒットラーが演説したとされる建物 (現在はビアホール, ミュンヘン)



ドイツのマック

The 6th International Academic Conference on Immuno-& Molecular Biology in Otorhinolaryngology (IAC) In Jeju Island, Korea, October 17-20, 2002

福 山 聡

1984年に本学会 (IAC) は耳鼻咽喉科領域における病態を免疫学的, 分子生物学的に検討するために設立され, 毎回, 基礎および臨床の分野から多くの研究者が参加しております。今回の演題数はシンポジウムが26題, 耳科学33題, 鼻科学18題, 頭頸部外科領域6題, その他 poster 発表26題でした。

当教室からは黒野教授をはじめ, 松根先生, 早水先生, 谷本先生, 福山の5名が参加しました。開催地である Jeju 島 (済州島) は韓国のリゾート地として有名で人口は53万, その大きさは大阪府と同じくらいです。福岡から直行便で約1時間と比較的気軽に行ける観光地と考えられています。

学会はまず大山名誉教授による honor lecture ではじまりました。五感と精神がいかにヒトの健康に作用しているかについて述べられとてもスケールの大きな講演でした。アロマセラピーのひとつラバディンが唾液の IgA 産生に影響する事などは, 粘膜免疫学的にも非常に興味のもてるお話でした。近年, 幹細胞や再生医学が先端医療として注目を集めていますが, AF Ryan (UCSD, USA) や伊藤教授 (京都大) の内耳における幹細胞移植の研究は人工内耳に続く新たな感音難聴に対する治療方法として期待できると思われました。数年前より免疫学において Toll like receptor (TLR) を中心とした自然免疫の解明が大きなテーマになっています。Lim (House Ins, USA) によると中耳粘膜上皮では TLR 2, 3, 4 の発現が認められるそうです。TLR の解析は上気道免疫応答を解明する上で重要なテーマであり当教室の研究課題のひとつであります。今後, 耳鼻咽喉科領域においても多くの報告がなされることが予想され, 非常に刺激になりました。鼻科学領域ではアレルギー性鼻炎の下甲介粘膜や鼻茸を proteome や DNA microarray などによる網羅的な解析の報告も見られた。一方で Social program では大きな寺院に行き韓国製の精進料理をごちそうになりました。またスカーフの染め物も体験でき, 地元の方々のおもてなしのお陰で貴重な異文化体験をすることができました。4年前はイタリアで本学会に参加させていただきました。その時のいろいろな出来事を思い出したり, 何も訳が分からずあたふたしていた自分を振り返るいい機会でした。少しはましになったの

かなと思う一方、相変わらず英語が使いえんと反省しました。次回は4年後 Sidney で開催されます。そのころ耳鼻咽喉科の免疫学、分子生物学はどれほど進歩しているのでしょうか？きっと私は相変わらず“ぐーたら”でしょうが…。

第8回 Asian Research Symposium in Rhinology

谷本 洋一郎

2003年3月15日から16日の間に台湾で開かれたこの学会に、黒野教授をはじめ、大堀先生と自分の3人で参加させていただきました。学生時代から英語が嫌いでひたすら避けつづけてきた自分にとって、この初めての国際学会デビューはハプニング続きでした。まず出発の福岡空港で国際線乗り場まで何を思ったか歩いていこうとしており、もしあの時、黒野教授にたまたま見つけていただき、声をかけていただかなかったら、私と大堀先生は国際線の飛行機に乗り遅れてしまっていたでしょう。

発表のほうは、なかなか台湾のパソコンにつながらず、おまけに英語はよくわからず、やっとながったところでほっとしてしまい、スライドを一通り確認するのを忘れてしまったのです。そして、いざ発表となって、もちろん私は一生懸命繰り返し読んできた原稿をひたすら読むだけ、しかしふとスライドを見ると、そこにあるはずの数字が……となっているのです。後で考えてみるとスライドの数字を日本語のフォントで打ってしまっていたらしく、台湾のパソコンでは読み取れなかったようなのです。しかし発表中にそんなこと思いつくはずもなく、たとえ思いついたとしても、それをアドリブで説明できる英語力は私にはなく、ただひたすら原稿を読みつづけるしかありませんでした。質問ももちろんありましたが、ほとんど理解不能で、あれほど日本語を恋しく思ったことはありませんでした。

発表後、台湾最後の日に大堀先生といったフリーマーケットでストレスを発散するかのようになり、買い物しまくりました。(と云うての物価が安いので、たいした値段ではありませんが)

また SARS が言われ始めた頃でもあり、隣で咳をする大堀先生に少しびくついたこともよく覚えています。

4. 関連病院便り

国立病院九州循環器病センター耳鼻咽喉科便り

勝田 兼司・松崎 勉・岩坪 哲治

平成14年4月に私が林先生の次に赴任してから当科は勝田兼司副院長，松崎勉医長と私岩坪の3名で診療にあたっております。当院の特徴として開業の諸先生方からご紹介頂く患者様の数が多く，それに伴い通常疾患から頭頸部腫瘍まで幅広く，手術症例も多くなっております。循環器病センターという名前の影響があるかどうかはわかりませんが以前よりは手術件数は減少傾向にあるとのことですが，その分インフォームドコンセント等に十分な時間を割くようにしており，患者様の立場に立った医療の実践にむけ努力しております。また，頭頸部腫瘍再建手術も数多く行っており，終末期医療にも力を注いでおります。毎週月曜日の午後には看護師の方々，栄養士の方々，そして我々医師により病棟カンファレンスが行われており，患者様方の病状のみならず精神面や家族背景等に対する意見の交換がなされ日々の診療に還元されております。当科にて平成9年から使用されているクリティカルパスは現在では通常疾患のかなりの症例で使用されており医療の標準化，質の向上のため貢献しております。私もこのような環境の中で驚きの連続であつという間に一年が過ぎてしまいましたが，EBMの実践，医療の効率化，安全性の確保など紙面でしかみることがなかったものを肌で感じることができ非常に有意義であったと思います。今後もこのような観点を頭に置いた医療の実践をめざして日々努力していきたいとおもっております。

(文責：岩坪)

県立大島病院便り

西元 謙吾・高木 実

私がこの県立大島病院にきてはや1年になろうとしています。以前、奄美大島に赴任されてきた諸先生方にいろいろ伺ってはいましたが、とにかく夏は暑いし、雨は多いし、亜熱帯の気候に慣れるのでたいへんでした。(個人的には途中で単身赴任になり、部屋の中のカビとの闘いが思い出されます)

さて、耳鼻咽喉科の診療ですが、患者の絶対数が鹿児島にいるところより少なめの印象があります。現在、奄美大島には常時開設されている耳鼻咽喉科は当病院を含めて3施設ありますが、話を聞くとどの病院も患者数が減っている様です。周辺人口が少なくなりつつあるせい、それとも平成14年度の医療改正の影響でしょうか、今後の離島医療に不安を隠せないこの頃です。しかし、患者ひとりひとりに対する診療密度が高くなり、それぞれの症例への勉強がより充実する様心掛けることでそれなりに忙しく日常診療を行っています。

疾患の特徴ですが、鹿児島とくらべて疾患分布に別段かわりはありませんが、鼻の手術症例だけは極端に少ないように感じられます。また、たとえ内視鏡副鼻腔手術の適応があったとしても、患者さんが手術を拒んだり、手術直前でキャンセルになったりすることが特徴的です。大島の人はあまり鼻の不都合には感心を示さないのでしょうか？そのかわり、かなりひどい頭頸部腫瘍症例は多く、いきなり末期医療をせざるを得ないこともたびたびです。あと、交通事故や自殺未遂などの顔面外傷が多いことに驚かされました(しかもかなりひどい)。出水市立病院に次ぐ厳しい当直にも慣れましたが、交通事故が運ばれてくるといまだに緊張します。

大島病院での大きな行事は、夏祭り、秋の運動会、忘年会の3つです。夏祭りは舟漕ぎから踊りまでフルに参加すると体力的に厳しいので、去年は舟漕ぎは遠慮しました。秋の運動会では、参加するだけで色々な商品がもらえて、生活日用品にしばらく困らなかった程です。忘年会はみなさんのご想像にお任せします(私事のため全部は参加できませんでしたが)。とにかく、公私共に忙しく過ごせる大島はほんとうにいいところです。

(文責：西元)

県立北薩病院便り

大城 浩

北薩病院のある大口市は宮崎、熊本両県と接して位置する県境の市です。特に水俣、人吉まではそれぞれ40分ほどで行けますので、大口市の人たちは病院や買い物などに国分や鹿児島まで1時間以上かけて行くより県境を越えて出かけることが多いようです。

鹿児島県の北海道と言われるように、冬は寒く、朝仕事に出かける前には車のフロントガラスにお湯をかけて氷を溶かす必要があります。

北薩病院は大口市の中心から山の中に数キロ入った所にあります。近くにある曾木の滝は東洋のナイアガラと呼ばれており、観光名所になっています。市内にある忠元公園は城跡で、春になると桜が咲き美しいところです。米、焼酎の名産地でもあります。

北薩病院の耳鼻科は一昨年の4月から1人体制になりました。前任者の相良先生は職員や患者から人気が高く、昨年4月に後任として赴任したときは、相良先生は良かったなどといわれもしましたが、早くも1年が経ってしまいました。医局をはじめ看護師その他の職員にいい人が多くとても働きやすい職場だと思います。

診療は月曜日から金曜日に午前中の外来診療と月・金曜日午後のアレルギー外来があり、木曜日午後からはほぼ2件ずつ手術を行っています。殆どが扁摘ですが、時にESSやLMSなどが入っています。

無理のない範囲で自分なりに頑張っていこうと思っています。

今後ご指導を宜しくお願いいたします。

県民健康プラザ鹿屋医療センター便り

唐木 敦子

鹿屋医療センターに赴任して1年2ヶ月の間、様々な症例を経験することができました。鹿屋医療センターは大隈で唯一耳鼻科の入院施設のある総合病院であったため、(今年の4月からは大隈鹿屋病院も耳鼻科が常勤になりましたが)突発性難聴、扁摘か

ら Ca の end stage まで、ありとあらゆる患者さんが受診、入院されました。もちろん手術症例も非常に多く、ほとんどの症例で術者、または助手として関わることができました。また、他科の先生方とのつながりも強く、いろいろなことを吸収できたように思います。

鹿屋では土地柄なのか、stage IV の状態で受診される Ca の患者さんが多く、ステルベンにもたくさん立ち会うことになりました。しかしその一方で、瀕死の状態入院し、もう退院できないと思っていた患者さんが退院していくことも多く、心の中で喜んだり、悲しんだり、忙しい毎日でした。

一番心に残っている症例は、3歳のころから当院に入院している19歳男児（でき得ることはやったつもりでしたが、20歳の誕生日を迎えることなくステルベンしてしまいました）と、41歳の unknown origin tumor の男性（疼痛コントロールがなかなかうまくいかず、非常に考えさせられる症例でした）で、手術に始まり、輸液、輸血、感染コントロール、合併症、疼痛コントロール、精神的なケアなどについて、深く考えさせられました。

忙しい毎日でしたが、外来、入院ともに、たくさんの症例を診ることができ、鹿屋での経験は大きな財産になったものと自負しています。今後もこの経験を活かして、少しでも力がつくように頑張っていきたいと思います。

最後にこの1年間に鹿屋医療センターで行われた、手術の一覧を記載します。

総数361例 （323人）

耳症例	19例
鼓膜チューブ留置術	2例
鼓膜穿孔閉鎖術	10例
鼓室形成術	5例
顔面神経減荷術	1例
先天性耳瘻管摘出術	1例
鼻症例	106例
デビコン	47例
ESS	59例

咽頭・喉頭症例	138例
扁桃 (UPPP)	85例
アデノイド	12例
LMS	37例
舌・口腔良性腫瘍	4例
頸部	75例
顎下腺	12例
耳下腺	6例
甲状腺	25例
頸部良性腫瘍	14例
緊急気管切開	18例
骨折	7例
上顎・頬骨 tripod 骨折	4例
眼窩吹き抜け骨折	3例
Ca (甲状腺は頸部に含む)	16例
上顎Ca (デンケル)	1例
舌Ca	3例
上咽頭Ca	1例
中咽頭Ca	2例
喉頭Ca	5例
顎下腺Ca	1例
原発不明Ca	3例

藤元早鈴病院便り

岩下 睦郎

I 病院が新築された

今まで内科系・外科系が分かれていましたが、新病院ができ同じ建物内に全科揃い患者さんの移動も楽になりました。ちなみに耳鼻科外来はエスカレーターで上がった2階の正面36番診察室です。ただ、耳鼻科外来には窓がなく少し息が詰まる感じがします。また、敷地内にコンビニのファミリーマートができ大変便利になりました。県内初との事で地元のニュースに出ました。

II サイバーナイフの導入

新病院になってサイバーナイフが導入されました。耳鼻科領域でも御紹介いただいておりますが、現在国の認可問題で停止中でご迷惑をおかけしております。

III PET の導入

PET 検診センターを立ち上げ早期発見・早期治療を目標に頑張っております。

IV 循環器科開設

いままで循環器専門のドクターが不在でしたが、鹿大第1内科から3人のドクターが派遣していただき、循環器外来行っております。

V NICU 開設中

現在、新生児病棟開設のため改築中です。

VI 心臓外科開設

循環器科ができたのに合わせて OPE もできるよう今、鹿大第2外科のドクターに来て頂き準備中です。

VII 麻酔科常勤から非常勤に

いままで麻酔科医2人常勤していたのが、諸々な事情により火・木・金のみの非常勤になるのに合わせて、耳鼻科の手術の枠が火曜日の午前中になりました。それに伴い火曜日の外来は休診になりました。

VIII 新しいユニット・ネブライザーを買ってもらった

耳鼻咽喉科外来開設時から使っていたユニット・ネブライザーでしたが、最近故障が多く、新病院に移転する機会に新しいものを買ってもらいました。ユニットは車椅

子の患者さんにも鼻処置を行いやすいように1セットホースレスの特注品にしてもらいました。また院内感染を考え、ファイバー洗浄機も買ってもらいました。

IX 看護婦さん減

着任時3人いた外来スタッフが1人になり、ばたばたしながら外来を行っております。

出 水 市 立 病 院 便 り

関 大八郎・下 麥 哲也

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？

去年の4月から出水市立病院で、仕事をさせて頂いている下麥です。

この病院に来て、まず驚いたのは、周囲の景色です。家の広さも、病院からの近さも、もちろん驚きの対象でしたが、過去に先輩が報告されていますので、僕は別のものにしてみました。さて、その景色なのですが、病院のすぐ隣には、桜並木の並ぶ大きな河が流れ、周りには荒涼たる平野が、どこまでも広がっています。本当に何も無いところに、病院の高層ビルディングが建っているため、病院からの景色は抜群です。逆に出水市内のどこにいても、病院が目に入ります。「いつ呼び出しがかかるだろう？」と考えてはいけないので、なるべく見ないことにしています。それでは、この素敵な出水市立病院について、御紹介させていただきます。

外来は、月曜から金曜までで、うち木曜日のみ終日外来日です。午後の手術あるいは検査までに、患者さんを待たせることなく、的確に診察、治療することは、とても大変です。出水の患者さんは攻撃的なのか、すぐに病院に投書が来てしまい、めげることもしばしばです。僕は病院の中でもまだまだ若輩者です。そんなときは、関先生はもちろん、他科の先生とも相談してがんばっています。

手術日は現在、月・水・金曜日になりました。予定手術は、週2例ほぼ確実に存在します。これに緊急手術や飛び込みの患者さんが加わりますので、手術枠はほとんど一杯かオーバーしてしまいます。それでも麻酔科の先生は、「どんどん手術をいれていいよ」と励まして？下さいますので、感謝しています。

そして、もはや出水市立病院名物?となっている救急当番があります。他の科の先生が冗談で、「出水市立病院とかけて、救急当番きついと、とく」ともらした程です。出水市立病院の救急当番はひとりで、全ての時間外外来患者と、病院内の超緊急事態（主治医到着までのつなぎなど）に対応するのが原則ですから、とても大変で不安でもあります。しかし、その反面、プライマリケア習得の絶好の機会でもあります。重症患者を受けてしまった時は、さすがに重圧を感じますが、診療後は達成感と充実感があり、それほど苦痛にならないものです。むしろやっかいなのは、本当にちょっとしたことで、救急車でやってくる、「自称重症患者」、自分から治療を指定し、強要してくる「マニア患者」、酔っ払い、浮浪者などの「患者でないひと」などでしょうか。このような人々は、非日常的な時間に、大量に来院され、脱力感と疲労だけを与えてくれます。救急当番がきつい本当の理由はこれなのでしょうか？

いろいろ書きましたが、出水は少し寒いですが食べ物がおいしく、自然豊かな住みやすい場所です。このような環境に恵まれたことに感謝して、毎日しっかりと経験をつみ、勉強して、一人前の耳鼻咽喉科医になりたいと願っています。（文責：下麥）

済生会川内病院便り

岩元 光明

平成13年の10月に赴任してから、かれこれ1年半が過ぎました。一人体制でやっているのか不安もありましたが、周りの方の助けもあって何とか日々の診療をこなしています。この1年間で、世間ではワールドカップがあり、イラクへの侵攻あり、病院でもいろいろな事件があり、騒がしい1年でした。何時まで川内にいるのか分かりませんが、また何時まで一人なのかも分かりませんが、今まで以上に気を引き締めていこうと思います。

鹿 児 島 生 協 病 院 便 り

森園 健介

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

鹿児島生協病院勤務の森園です。前年に引き続いて、こちらからの関連病院だよりを書くことになりました。気が付けば、生協病院での勤務ももうすぐ丸2年経とうとしており、月日の早さをしみじみ感じる今日このごろです。

去年から今年にかけての鹿児島生協病院の大きなニュースといえば、何とんでもなく谷山生協クリニックが開設されたことになるかと思えます。生協病院のすぐ隣に建てられた谷山生協クリニックは、昨今の医療制度改革のあおりを受けて、門前診を行うための施設として建てられた外来専門のクリニックです。その立派な外観だけではなく、本格的な電子カルテも導入されており、システム面でも従来の体制より充実しております。

鹿児島生協病院から移動した内科・小児科・外科・整形外科の各外来、および生協歯科クリニックから移動した歯科外来といった主だった外来が開設されており、充実した外来診療が日々行われております。

って、われらが耳鼻科はどうしたのかというと、いまだ従来の鹿児島生協病院内にある耳鼻科外来にて診療を行っています…。おそらく理由は、単純に谷山生協クリニックの面積がやや狭かったために、全科が移転できなかったためと思われまふ。いや、決して耳鼻科の診療に問題があったわけではないですよ？それはさておき、現在の鹿児島生協病院内では我が耳鼻科のほか、新たに開設された泌尿器科、整形外科の一部（こちらにリハビリ施設があるため）、および救急外来が外来診療を行っています。

そういうわけで、生協クリニックが開設した後も、耳鼻科ではあまり変化が感じられませんでした。開設による外来看護師の再編成を受けて、新たに耳鼻科を担当することになった看護師さんに江川先生の愛の鞭が飛んだことくらいでしょうか。

あと、前回の関連病院だよりも書きましたが、生協病院の耳鼻科では小児の比率が他の関連病院に比べて高い傾向にあります。今回の谷山生協クリニックの開設に伴って小児科外来が移転したため、外来患者数の減少が懸念されました。しかし、実際には移

転当初に若干の減少がありましたが、最近では以前の体制の時と比べてほぼ変化ないようです。

今年度中にはこちらの生協病院のほうでも電子カルテが導入される予定となっており、それに対応していくかが今後の課題となりそうです。

耳鼻科外来としては、専門医研修施設として申請するために必要であった電気眼振図計を、病院にお願いして購入していただきました。以前あったものは故障しており、代替部品がなかったため購入となったわけですが、今回購入していただいた機械はパソコン上でセッティング、眼振図の記録、一部の解析、データの保存が行えるようです。昔ながらの機械しか目にしたことがなかったので、非常に新鮮です。

電子カルテといい、最近のシステムの進歩には驚かされるばかりです。今後の医療においては、医師としての知識はもちろんですが、こうしたさまざまな技術に付いても造詣を深めていかななくてはならないのかな、と考えさせられる今日このごろです。

天 辰 病 院 便 り

新納えり子

平成13年10月に、天辰病院の1件隣（元桐原歯科）に外科と耳鼻科外来が移り、あまたつクリニックがオープンしました。その後、平成14年3月に外科外来が天辰病院の方に戻り、あまたつクリニックは耳鼻科外来だけになりました。一階に受付事務、二階が耳鼻科外来&待合室ですので、明るくゆったりとした造りになっており、また待合室には畳コーナーもあり子供たちの格好の遊び場になっています。

朝一番からは、保育園や幼稚園に行く前のこどもたちで賑わい、昼からの時間は幼稚園を終えた子供たちがやってきます。時には幼稚園や保育園がそのまま移動してきたように待合室を子供たちが走り回っている事もあります。

外来診療は月、水、金が朝9時から夕方6時まで。火曜日は午後2時から6時まで、土曜日は朝9時から昼1時までで、火曜日の午前中は手術日となっていますが、最近で

は時々鼻茸摘出を行う程度です。

入院は大学病院から、突発性難聴、顔面神経麻痺で高圧酸素治療や点滴を行う患者さん、術前の諸検査を入院で行う必要のある患者さんなどが紹介されてきます。多い時期は十数人入院患者さんのいることもありましたが、少ない時は0、とばらつきがあります。外来患者の多い時期に入院患者も多いと、外来を終えてから病棟を回らなくてはならないためちょっと大変です。

クリニックは、医師1人、看護師2人、事務1～2人で、レントゲンが必要な時だけ技師に病院から来てもらっています。看護師さんは二人とも幼稚園から小学生の子供のいるママさんですので、子供の扱いからお年寄りの相手まで、そつなくこなしてくれるため、外来のチームワークはばっちりです。

ここの耳鼻科は、開設当初から比較的短期間で医師が交代していましたが、私になってから3月で丸6年変わっていません。つまり今度小学校に入学する子供は、ここの耳鼻科の医師としては私しか知らないという事になります。

あっという間の6年でしたが、子供たちと違って私には何か成長した事があるかな、と考えさせられる今日この頃です。

今村病院分院便り

河野もと子

平成14年4月から私が今村病院分院に勤務しております。外来診療は、月曜日午前、(午後は特殊検査、特にエコー)、火・木・金曜日午前午後、土曜日午前で、手術症例があるときは火曜日午前としておりました。平成14年度の外来患者総数は6432人、入院中患者の診察は1303人でした。

耳鼻咽喉科の入院患者延べ数は46人、約4割(19人)は扁桃摘出や鼻、リンパ節生検などの手術患者であり、残りは突発性難聴、急性化膿性扁桃炎や扁桃周囲膿瘍など保存的治療を行った患者さんでした。手術数は、入院手術31例、外来手術9例、内訳は扁桃摘出5例、鼻茸切除(すべて外来手術)5例、鼻内内視鏡手術および鼻中隔矯正術など10例、頸部リンパ節生検12例(当院血液内科から依頼)、気管切開8例(当院救急・総合内科

からの依頼), 他 1 例でした。手術日は週に 1 日午前のみ, 全身麻酔は 2 週間以上前に
鹿大麻酔科に依頼する, という制約のため時にはニーズに応えられないこともありました。
なお, 本年 6 月から早水佳子先生が常勤となり, 診療体制が若干変更になる予定です。

救急・総合内科との関連

平成13年から救急・総合内科が開設され, 24時間救急疾患の受け入れをしているため,
休日や時間外に扁桃炎, 扁桃周囲膿瘍, めまいの患者さんがおられると, ここで対応し
入院させ, その後耳鼻科へ紹介され診察ということが多くなっています。扁桃周囲膿瘍
に対する切開の可否をコンサルトされ, 当科で判断し, 必要があれば処置し, 局所の状
態を当科でも見ていくという形をとっています。めまい患者のコンサルトも多く, 紹介
があれば自発眼振, 頭位頭位変換眼振だけは必ず所見をとり, 末梢性が疑われれば当科
でフォローし, 中枢性が否定できなければそのようにコメントを返しています。しかし,
眼振所見, 聴力検査, 症状の性状などから中枢性疑いとコメントしても, 神経内科では
CT や MRI で腫瘍や梗塞が無ければ末梢性と信じて疑わない傾向があり, もどかしい気
持ちを感じるが多々あります。将来, 椎骨脳底動脈系の血流のダイナミックな変化・
異常を詳しく示せる画像検査法ができればと期待しています。

血液内科との関連

当院血液内科では白血病やリンパ腫, ATL の化学療法, 末梢血幹細胞移植を専門的
に行っており, 当科へは頸部リンパ節生検の依頼がよくあります。明らかな固形癌の頸
部転移が疑われるものには手をつけないよう気をつけてやっています。またここでは,
末梢血幹細胞移植後の GVHD (移植片対宿主病) の口腔粘膜病変というのをここで初
めてみることができ, 勉強になりました。

終夜睡眠検査 (PSG) の導入

睡眠時無呼吸症候群の診断のための, 終夜睡眠検査 (PSG) のシステムが当院にも本年 3 月
導入され, 基本的に週 3 日 (月・水・金) を検査日として行っています。まず, 耳鼻科で診
察をし, 鼻疾患の有無や咽頭形態をチェックした後, 一泊入院で PSG を行い, CPAP が必要
と診断されたら, 救急・総合内科でその導入・管理を担当するという形をとっています。まだ
検査数, 症例数が少ないですのでこれから増やしていくよう努めていきたいと考えています。

XI. 関連病院 (平成15年4月現在)



病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院九州循環器病 センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30～11:30)	月～金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	火・木 (8:30～17:00)	
県立大島病院	894-0015	名瀬市真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017	月～金 (8:30～10:00)	火・木・金
県立北薩病院	895-2526	大口市宮人502-4 TEL:0995-22-8511 FAX:0995-22-6783	月～金 (8:30～11:00)	水・木
県民健康プラザ 鹿屋医療センター	893-0011	鹿屋市打馬1-5-10 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944	月・火・水・金 (8:30～10:30)	月の午後 木
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30～11:00)	月・水・金
出水市立病院	899-0131	出水市明神町520 TEL:0996-67-1611 FAX:0996-67-1661	月～金 (8:30～11:00) 木のみ (再診) (14:00～16:00)	火・水・金

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
今給黎総合病院	892-0852	鹿児島市下竜尾町4-1 TEL:099-226-2211 FAX:099-222-7906	月・水・金 (8:30～16:30) 火・木・土 (8:30～11:30)	月～金
済生会川内病院	895-0074	川内市原田町 2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797	月～土 (8:00～11:00) 月・金のみ(再診) (14:00～16:30) 水の午後 第1・第3 特殊検査 第2・第4 補聴器外来 (14:00～16:30)	火・木の午後
かごしま生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30～17:30) 水・土 (8:30～12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	月・水・木・金 (8:30～17:10) 土 (8:30～11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00～17:00) 火 (9:00～11:00)	火の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
市比野記念病院	895-1203	薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715	火・木 (14:00～18:00) 土 (9:00～18:00)	
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・水・金 (9:00～18:00) 火 (14:00～18:00) 土 (9:00～13:00)	火の午前
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町 1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	火・木 (13:30～16:00) 土 (8:30～11:30)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	月・火・木 (13:30～16:30) 土 (8:30～11:30)	
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00～17:30) 水 夏(14:00～17:00) 冬(14:00～16:20)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30～15:30)	
鯨島病院	891-0406	指宿市湯の浜1-11-29 TEL:0993-22-3079 FAX:0993-22-3019	火・木 (8:30～17:30) 水(13:30～17:30) 土(8:30～12:00)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	第1・第3 金(8:00～16:00) 土(8:00～10:00)	
豊永耳鼻咽喉科	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2・第4 土(9:30～15:00)	